

# Chaucer, *Troilus and Criseyde* の語彙について

(その三)

(The Vocabulary of Chaucer's *Troilus and Criseyde*—Part III—)

野 呂 俊 文

(Toshifumi Noro)

## 序

引き続きジェフリー・チャーサー (Geoffrey Chaucer) (1343?- 1400) の長編物語詩 *Troilus and Criseyde* 『トロイラスとクリセイデ』で使用されている主要な語彙について古語や廃語になっているもので重要なものを見ていく。初回の「Chaucer, *Troilus and Criseyde* の語彙について (その一)」(Philologia 37, 2006 年) では副詞、接続詞を取り上げ、前回の「Chaucer, *Troilus and Criseyde* の語彙について (その二)」(Philologia 38, 2007 年) では前置詞、代名詞、形容詞を取り上げたが、最終回である今回の (その三) では名詞、動詞を取り上げる。同時代の詩人ジョン・ガワー (John Gower) (1330?-1408) の長編詩 *Confessio Amantis* 『恋する男の告解』を適宜引き合いに出して、使用語彙の頻度などについての比較も行ってみたい。作業手順として、*Troilus* 全五巻のうち第二巻をサンプルとして取り上げ、第二巻全体に見られる語彙を中心にみていくことにする。今回は名詞や動詞という品詞の性質上網羅的に見るのはあまり意味がないと思われるので、ここで取り上げるのは原則として重要語と思われる語に限定した。

テキストとしては次のものを使用した。

Walter W. Skeat, *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* in 6 vols.

(Oxford U. P., 1894, 1972)

G. C. Macaulay, *The English Works of John Gower* in 2 vols. (Oxford U. P., 1901, 1979)

語彙の使用頻度を調べる際には上記のテキストの電子版を使用した。これらの電子テキストは上記のテキストに忠実なものであり、上記のテキストと同じものと判断できる。

The Project Gutenberg Etext of Chaucer's *Troilus and Criseyde* (edited, proofed, and prepared by Douglas B. Killings, 1995)

The Project Gutenberg Etext of John Gower's *Confessio Amantis* (edited and proofed by Douglas B. Killings, 1994)

テキストからの引用文に邦訳を付けるにあたっては、宮田武志訳『トゥローイラスとクリセイデ』（ごびあん書房、昭和62年）を適宜参照させていただいた。それぞれの語についての記述は主に *The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM* (Oxford U. P., 1993) に依った。

語の作品内での使用回数を示すようにしたが、この数は厳密なものと言うより、およその目安を知るための概数とお考え頂きたい。特に、同じ語が複数の異なる綴りで表記されている場合は見落としが絶対には言い切れず、また同綴り異義語が存在する場合や同じ語に異なる品詞の用法がある場合などは、一つ一つ読んで判断したが、それでも読み違いの可能性を排除できず、また用法が微妙で判断に迷うような場合もあるからである。

なお、作品の年代の前に付けた a や c はそれぞれ a=ante (～年より若干前)、c=circa (～年頃) の意味である (a1400=before 1400、c1400=about 1400 など)。

## VI. 名詞

### 目次

accesse (=fever) / auctor (=author) / avyusement (=deliberation) / beheste,  
biheste (=promise; command) / borwe (=surety) / bote (=benefit, remedy) /  
brid (=bird) / condicioun (=character) / conning (ability) / cure (=care) /  
daunger(=disdain, etc.) / disaventure (=misfortune) / disese (=distress,  
suffering) / drede (=doubt) / eem (=uncle) / elde (=age) / emprise  
(=enterprise) / fare (=behaviour; fuss; condition) / no fors (=no matter) /  
fyn (=end, purpose) / governaunce (=self-control, etc.) / hele (=health, etc.) /  
Iupartye (=jeopardy) / kinde (=nature) / leche (=doctor) / lust (=pleasure,  
desire, wish) / Marte (=Mars) / morwe, morwen (=morning) / for the nones  
(=for the purpose) / ordenaunce (=arrangement, etc.) / plyt (=condition) /  
prees (=crowd) / proces (=discourse, argument) / prow (=profit) / prys  
(=price, praise, prize) / purveyaunce (=foresight, etc.) / pyne (=suffering) /  
reed (=advice, etc) / routhe (=pity) / savacioun (=salvation) / sawes  
(=speech) / sikernesse (=security) / skile (=reason, cause) / soun (=sound) /  
syk (=sigh) / tene (=ill-will, trouble) / thrift (=success, profit) / throwe  
(=time, while), throwes (=torments) / tweye, tweyne (=two) / wawe (=wave)  
/ weder (=weather) / wele (=joy, happiness) / wente (=path, turn) / wight  
(=person; time) / wone (=habit) / wreche (=vengeance, torment) / wyke,  
wouke (=week) / wyse (=way, manner) / wyte (=blame)

accesse (=fever)

Thou shalt aryse and see

A charme that was sent right now to thee,

The which can helen thee of thyn *accesse*, (1315)

起きあがってたった今届けられたまじないをご覧ください、あなたの熱病を治すことが出来る物ですよ。

「接近」を意味する *access* が、「急病」(*OED*9: A coming on of illness or disease, especially of sudden illness) や「発熱」(*OED* 10: An ague fit; ague, intermitting fever) の意味で使用されることがある。チャーサーは *Troilus* で 3 回これらの意味で *access* を用いている。上記の用例が *OED* における「発熱」の意味での初出用例である。「発熱」の意味での *access* の最後の用例は 1751 年のもので、「発熱」の意味は今日では廃義である。

#### auctor (=author)

For as myn *auctor*seyde, so seye I. (18)

原作者の語るままに、私は語るのですから。

*auctor* は 14 世紀から 17 世紀にかけてみられる *author* の綴り。

*auctor* はラテン語の *augere* (=increase 増大させる) から形成された行為者を表す名詞であり、英語でも 14 世紀から 17 世紀にかけては *auctour* などのように *-c-* を持った綴りが見られる。チャーサーは「生み出す人」、「発明者」、「造物主」、「著者」などの意味で使用している。

今日の *author* という綴りに見られるように *-th-* が現れるのは、16 世紀以降であり、1550 年頃 *auctour* の写本の異形として *aucthour* が登場した。このように *-th-* は人為的なものであったが、今日では *th* 音で発音されるようになっている。今日使用されている *-c-* のない *author* 形は 16 世紀に現れた形である。

*auctor* の *Troilus* 内での使用回数は 11 回である。

avysement (=deliberation)

*Avysement* is good bifore the nede. (343)

困らないうちによく考えるのがいい。

avysement は advisement の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。advise はフランス語 *aviser* からの借用語であり、*aviser* は後期ラテン語の *advisare* (見る) に由来する。avysement はチョーサーでは「見ること」(viewing)、「熟考」(deliberation) の意味で使用されており、‘take avysement’で「よく考える」の意味で用いられている。

*Troilus* での使用回数は 4 回である。

beheste, biheste (=promise; command)

what for hope and Pandarus *biheste*, (1329) (biheste=promise)

His grete wo for yede he at the leste.

希望やパンダラスの約束もあって、彼は少なくとも大きな悲しみを捨てた。

I yow nought requere,

To binde yow to him thorgh no *beheste*, (359) (beheste=command)

(Norman Davis の解釈)

ぼくは何も命令で彼と契りを結んでくれと言っているわけではない。

*biheste, beheste* は *behest* の 12 世紀から 16 世紀にかけての形。*behest* は OE 期には「約束」の意味しか持たなかったが、ME 期に *hest* (命令) の意味をも持つようになった。チョーサーでは「約束」(promise)、「命令」(command) の両方の意味で使用されている。「約束」の意味は今日では廃義で、*OED* による最後の用例は 1634 年のものである。今日では文語として「命令」、「頼み」の意味で用いられるだけとなっている。

*Troilus* での使用回数は *biheste* が 5 回、*bihestes* が 1 回、*beheste* が 2 回である。

**borwe (=surety)**

And, Venus here to *borwe*, (1524)

I hope, and thou this purpos holde ferme,

Thy grace she shal fully ther conferme.'

ヴィーナスに誓って言いますが、もし目的を堅持なされば、彼女のあなたに対する好意も確かな物になると思いますよ。

*borwe* は *borrow* の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。 *borwe* は元来「保証」(surety)、「担保、人質」(pledge, hostage) の意味で、'to *borwe*' で「～を担保にして」の意味となる。'Venus to *borwe*'は「ヴィーナスを保証として」、すなわち「ヴィーナスに誓って」の意味となる。動詞の場合は何かを借りるときに「担保を与える」の意味から、*borrow* は「借りる」の意味となる。

*Troilus* での名詞 *borwe* の使用回数は 5 回で、*borw* が 1 回である。

**bote (=benefit, remedy)**

Wo worth that herbe also that dooth no *bote*! (345)

薬効なき薬草は禍なるかな。

*bote* は *boot* (利益) の 13 世紀から 16 世紀にかけてみられる形。 *boot* は今日でも古語・詩語として用いられるが、かつては広く用いられた語であった。チョーサーでは「利益」(benefit)、「治療」(remedy)、「救済」(salvation) などの意味で用いられている。

*Troilus* での使用回数は *bote* が 12 回、*boot* が 1 回、*botelees* が 1 回である。

### brid (=bird)

Under the chambre-wal ther as she lay,  
Ful loude sang ayein the mone shene,  
Paraunter, in his *briddes* wyse, a lay (921)  
Of love,

[夜鳴鳥が] 彼女が臥している部屋の壁の下で、輝く月に向かって声高に、恐らく鳥なりに恋の歌を歌った。

brid は bird (鳥) の OE 以来の古い形で、15 世紀まで広く使用された。bird は音位転換 (metathesis) によって出来た形で、13 世紀から 15 世紀まで北方の形として使用され、15 世紀以降は標準形となった。逆に、brid のほうは 15 世紀以降は方言として使用されるだけとなった。チョーサーでは brid 形のみが使用されていて、bird 形は使用されていない。brid の意味は「鳥」、「若鳥」である。

*Troilus* での使用回数は brid が 1 回、briddes が 2 回である。

### condicioun (=character)

For trewely I holde it greet deyntee  
A kinges sone in armes wel to do,  
And been of good *condiciouns* ther-to; (166)

王子様が武勇に優れ、その上性格もよければ、ほんとうに、大変結構なことだと思います。

condicio(u)n は condition の 14 世紀から 16 世紀にかけてみられる形。今日の condition 形は 15 世紀以降使用されるようになった綴りである。condition は今日使用されている意味で用いられていただけでなく、「性質、人柄」という今日では廃義となっている用法が見られる。

*Troilus* での condicioun の使用回数は 4 回である。

### conning (=knowledge, skill)

And that she sholde han his *conning* excused, (1079)

That litel was,

自分の貧弱な知識を大目に見ていただきたいと、

*conning* は *cunning* の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。*cunning* という綴りは 15 世紀以降のものである。*can* の元の意味は「知る」であったが、*conning* はその動名詞であり、「知識」(*scientia*) が原義であった。*cunning* は「技術」(*skill*) という意味では今日でも使用されることがあるが、「知識」(*knowledge*) という意味は今日では廃義である。

*Troilus* での使用回数は 8 回である。

### cure (=care)

And yet his lyf al lyth now in my *cure*, (741)

しかも、彼の命は今わたしの力の中にあるんだわ。

*cure* はラテン語の *cura* (=care) が古フランス語経由で英語に入ったもので、今日の「治療」(*remedy*) の意味の他に、「配慮、世話」(*care, attention*) という意味をその主要な意味として持っていた。したがって、今日 *care* が使用されるような場合にも ME では *cure* が使用された。

一方、*care* は OE からの語で、ME では「悲しみ、心配」(*sorrow, anxiety*) がその中心的な意味であった。

*Troilus* での *cure* の使用回数は名詞 *cure* が 14 回、動詞 *cure* (治療する) が 3 回である。

### daunger(=disdain, etc.)

So lat your *daunger* sucred ben a lyte, (384)



だからお高くとまる態度は少し和らげてもらいたい。

daunger は danger の 13 世紀から 16 世紀に見られる綴り。danger は、ラテン語の dominus (主人) の派生語 dominium (支配) に由来する後期ラテン語 dominiarium が、古フランス語経由で英語に入った語である。daunger は元来「主人の支配権」、「人に危害を加えうる力」を意味し、チョーサーの英語では 1「軽蔑」(disdain)、2「(女性の) よそよそしさ」(reserve)、3「支配、力」(power)、4「ためらい」(hesitation) などの意味で使用されている。今日普通となっている「危険」という意味はチョーサーの時代にはまだ一般的とはなっていなかった。

daunger の形容詞形 daungerous もチョーサーではまだ「危険な」という意味ではなく、「高慢な」(haughty)、「よそよそしい」(aloof) というのがその一般的な意味であった。

Troilus での daunger の使用回数は 5 回で、そのうち 1 回は Daunger と大文字で書かれて擬人化されている。

### disaventure (=misfortune)

Allas! I wolde han trusted, doutelees,  
That if that I, thurgh my *disaventure*, (415)  
Had loved other him or Achilles,  
Ector, or any mannes creature,  
Ye nolde han had no mercy ne mesure  
On me, but alwey had me in repreve;

ああ、もしわたしが不幸にも、あの方なり、アキレス様なり、ヘクトル様なり、あるいはどなたかほかの男の方を愛したのだったら、叔父様は同情してくださったり、手加減なさったりすることなく、わたしを叱り続けたことでしょう、きっとそうだと思いますわ。

*disaventure* は *disadventure* の古い形で、「不運」(*misfortune*) の意味。今日では廃語であり、*OED* では初出が *Troilus* の上記引用箇所、最後の用例が 1638 年のものである。

*Troilus* での使用回数は 4 回である。

#### *disese (=distress, suffering)*

God woot that thy *disese* dooth me wo. (1360)

全く、あなたの苦悩でほくも気が滅入ってしまいますよ。

*disese* は *disease* の 14 世紀から 15 世紀にかけて見られる綴り。*disease* は語源的に「安楽の欠如」(*absence of ease*) を意味し、「悩み、苦しみ」(*=distress, suffering*) が元の意味であった。チョーサーはだいたいこの意味で *disese* を使用している。今日普通となった「病気」という意味はチョーサーの晩年頃に現れたようで、*OED* による *disease* の「病気」という意味の初出用例はチョーサーの同時代人 Gower の *Confessio Amantis* からのものである。

*Troilus* での名詞 *disese* の使用回数は 12 回である。

#### *drede (=doubt)*

I am oon the fayreste, out of *drede*, (746)

疑いもなく、わたしくらい美しい女性はいない。

*drede* は *dread* の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。「恐れ」を意味する *dread* には 14 世紀から 16 世紀まで「疑い」(*doubt*) という意味の用法があった。'withouten (any) *drede*'や'out of *drede*'で「疑いもなく」(*doubtless*) という意味で使用された。*OED* での *dread* の「疑い」という意味の初出は 1340 年のものであり、最後の用例は 1556 年のものである。

*Troilus* での名詞 *drede* の使用回数は 52 回である。

### eem (=uncle)

'Now, my good *eem*, for goddes love, I preye,' (309)

Quod she, 'com of, and tel me what it is; ...'

彼女は言った「ねえ、叔父様、後生ですから、さあ仰って、何のことだか。」

*eem* は OE からの語で「叔父」(uncle) の意味。*Troilus* では同義の *uncle* も使用されているが、*uncle* はラテン語の *avunculus* (母方の叔父) が古フランス語経由で英語に入ったものである。

*Troilus* での使用回数は *eem* が 15 回、*em* が 1 回、*emes* が 2 回であり、一方、*uncle* は 19 回使用されている。

### elde (=age)

And *elde* daunteth daunger at the laste. (399)

最後には老齡が輕蔑を打ち砕く。

Thenk eek, how *elde* wasteth every houre (393)

In eche of yow a party of beautee;

考えてもらいたいんだ、時がたつにつれて女性一人一人の美しさがいくぶん失われていくっていうことを。

*elde* は *eld* の 12 世紀から 16 世紀にかけてみられる綴り。*eld* は「老齡」(old age)、「年齡」(age)、「破壊するものとしての) 時間」(time) を意味する。*eld* は今日では古語・詩語であり、「年齡」の意味では方言である。

*Troilus* での *elde* の使用回数は 3 回である。

### empryse (=enterprise)

Men shal reioysen of a greet *empryse* (1391)

Acheved wel,

大きな仕事がうまく成就されたときには人は喜ぶでしょう。

*emprise* は *emprise*, *emprize* の 14 世紀から 15 世紀に見られる綴り。

*emprise* はラテン語の *prehendere* (=take) に *in-* の付いた \**imprendere* の過去分詞が、古フランス語経由で英語に入ったものであり、「企て」(*undertaking*)、「冒険」(*adventure*) の意味で使用された。*emprise* は今日では古語である。

*Troilus* での使用回数は 3 回である。

**fare (=behaviour; fuss; condition)**

Now is this the grettest wonder

That ever I sey! Lat be this nyce *fare*! (1144)

こんなに驚いたことはなかった。こんな馬鹿なまねはよしてもらいたいね。

And if thou nilt, wyte al thy-self thy care,

On me is nought along thyn yvel *fare*. (1001)

もし嫌なら、いくら苦しまれても自業自得で、あなたのご不幸はぼくのせいじゃありません。

由来「行くこと、旅」を意味した *fare* は、チョーサーでは 1「ふるまい」(*behaviour*)、2「大騒ぎ」(*fuss*)、3「状態」(*condition*)、「繁栄」(*prosperity*) などの意味で使用されている。また 'yvel *fare*' で「不運」(*misfortune*) の意味となる。

*Troilus* での名詞 *fare* の使用回数は 15 回である。

**no fors (=no matter)**

No *fors* of that; (1477)

そんなことは何でもありません。

What *fors* were it though al the toun behelde? (378)

たとえ町中の人が見たとしてもたいしたことではないよ。

*fors* は *force* (力) の 13 世紀から 16 世紀にかけてみられる綴り。この語がフランス語から英語に入った 13 世紀頃から 17 世紀まで、*it is no force* で「かまわない」(=*it does not matter*)、*what force?* や *no force* で「かまうものか」(=*what matter?*) のような用法があった。この用法はフランス語の同様な表現と平行したものであった。

Skeat 版 *Troilus* では *force* という綴りも 2 回使用されているが、それらは「力」という意味の用法の場合で、「かまわない」という意味ではすべて *fors* という綴りが使用されている。*Troilus* での使用回数は、*no fors* が 5 回で、*what fors* が 1 回である。

#### *fyn* (=end, purpose)

For for o *fyn* is al that ever I telle. (1596)

すべて一つの結末のために話をしているのですから。

*fyn* は *fine* (終り) の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。ラテン語の *finis* (終り) が古フランス語の *fin* となり、ME に入ったものである。*fyn* の意味は 1「終り」(*end*)、2「目的」(*purpose*) である。

*Troilus* での名詞 *fyn* の使用回数は 19 回である。一方、同義の名詞 *ende* は 30 回使用されている。

#### *governance* (=self-contro, etc.)

Ryd forth thy wey, and hold thy *governance*; (1020)

馬に乗っていくんですよ、そして自制心を保ってください。

*gouvernaunce* はチョーサーでは 1「支配」(rule)、2「管理」(management)、3「ふるまい」(behaviour)、「自制心」(self-control) などの意味で使用されている。このうち 3 の「ふるまい」、「自制心」の意味は今日では廃義である。

*Troilus* での使用回数は 9 回である。

### hele (=health, etc.)

For myn estat, and also for his *hele*. (707)

私の身分のためにも、またあの方のご健康のためにも。

*hele* は *heal* の 12 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。チョーサーでは 1「健康」(health)、2「繁栄」(prosperity)、3「救済」(salvation) などの意味で使用されている。

動詞 *heal*(癒す) の名詞用法は今日では廃語であり、今日ではその派生語 *health* が用いられている。なお動詞 *heal* は *whole* と同語源で、*make whole* を意味する。

*Troilus* での使用回数は 14 回である。

### Iupartye (=jeopardy)

For myn estat lyth in *Iupartye*, (465)

わたしの立場が危機に瀕しているんですから。

For Troye is brought in swich a *Iupartye*, (*Troilus* V. 916)

That, it to save, is now no remedye.

トロイは危機に瀕していて、それを救う手だてもない状態ですから。

*iupartye* は *jeopardy* の 14 世紀から 15 世紀にかけて見られる綴り。この語は元来チェスなどのゲームの用語で、古フランス語の 'iu parti', 後の 'ieu parti'

に由来し 'divided play or game, even game' を意味し、そこから「不確かさ」(uncertain chance, uncertainty) の意味となった。音韻変化により *-parti* が *-pardy* となり、17 世紀以降 *jeopardy* という綴りで書かれるようになった。

*iupartye* には「(チェスの)問題」もあり、チェッカーはこの意味でも使用しているが、

第 1 の引用文は *OED* が 2 の定義で説明している

'A position in a game, undertaking, etc. in which the chances of winning and losing hang in the balance; an even chance; an undecided state of affairs; uncertainty; chance.'

の意味であり、*OED* にはこの箇所が引用されている。

また、第 2 の引用文の *iupartye* は「危険」の意味で使用されていて、*OED* が 3 の定義で述べている

'Risk of loss, harm, or death; peril, danger.'

にあたり、*OED* はこの箇所をこの意味の初出用例として引用している。

*Troilus* での使用回数は *iupartye* が 7 回、*iupertye* が 2 回である。*Confessio Amantis* では *jeupartie* が 6 回使用されている。

### kinde (=nature)

That every wight, but he be fool of *kinde*, (370)

Wol deme it love of freendship in his minde.

生まれつきの馬鹿でなければ、誰でもそれが彼の人の友情に厚いせいだと思うだろう。

*kind* はいろいろな語義において *nature* と同義であった。今日「自然」という意味では *nature* という語を用いるところを、本来の英語では *kinde* で表現していた。*nature* はラテン語の *natura* がフランス語経由で英語に入ったもので、*OED* での初出用例は a1300 年の *Cursor Mundi* からのものである。of *kinde* で

by nature (生まれつき) の意味となる。

チョーサーでは *kinde* と *nature* の両方が使用されている。*Troilus* での *kinde* の使用回数は 22 回であり、*nature* の方は 6 回使用されている。

### leche (=doctor)

And every wight gan waxen for accesse

A *leche* anoon, (1579)

すぐに誰もが熱病の医者になった。

*leche* は *leech* の 12 世紀から 16 世紀まで見られる綴り。*leech* の「医者」(*doctor*) という意味は今日では古語・詩語となっている。

*Troilus* での使用回数は *leche* が 7 回、*leches* が 1 回である。

### lust (=pleasure, desire, wish)

I shal myn herte ayeins my *lust* constreyne. (476)

無理にでもそう言う気持ちになってみますわ。

*lust* はチョーサーでは 1「喜び」(*pleasure*)、2「欲望」(*desire*)、3「願い」(*wish*) の意味で用いられている。「欲望」以外の意味では今日では廃義である。

*Troilus* での使用回数は 23 回である。

### Marte (=Mars)

O cruel god, O dispitouse *Marte*, (435)

残酷な神よ、無慈悲な軍神よ。

*Marte* は 軍神 (あるいは火星) *Mars* の別綴り。ギリシアの軍神 *Ares* と同一視されたローマの戦の神 *Mars* は、対格などの斜格では *Martem* などのように t



が現れたため、チョーサーの作品では Mars という形と Marte という形の両方が用いられている。

*Troilus* での使用回数は Mars が 8 回、Marte が 2 回、Martes が 1 回である。*Confessio Amantis* では Mars が 15 回、Mart が 4 回、Marte が 3 回、Martes が 2 回使用されている。

**morwe, morwen (=morning)**

Whan *morwe* com, (65)

朝が来たとき

The *morwen* com, and neighen gan the tyme (1555)

Of meel-tyd,

朝が来て、食事の時間が近づいた。

*morwe* は *morrow* (朝) の 14 世紀から 16 世紀にかけての形であり、*morwen* は *morn* (朝) の 13 世紀から 15 世紀にかけての形である。チョーサーは *morning* の 13 世紀から 14 世紀にかけての形である *morweninge* を他の作品で使用しているが、*Troilus* では見られない。*morwe* は「朝」、「翌日」の意味である。

*Troilus* では「朝」という語として *morwe* が最も多く使用されていて、46 回見られる。*morwen* は 2 回使用されている。

**for the nones (=for the purpose)**

the sturdy ook,

On which men hakketh ofte, *for the nones*, (1381)

そのために何度も切り刻まれた頑丈な樫の木が、

\*for þan anes (その一つのこのために) が for þe nanes [nones] のように誤って分析されて生まれたフレーズである。文字通りには 'for or with a view to the one (thing, occasion, etc.)' の意味。\*for þan anes の属格 anes は、元来、与格の ane であったものが、属格 anes によって置き換えられたものである。意味は 1 「その目的のために」(OED: for the particular purpose)、2 「韻文であり意味のない埋め草」として使用されることがある。

*Troilus* での for the nones の使用回数は 4 回である。

### ordenaunce (=arrangement, etc.)

Right for to speken of an *ordenaunce*, (510)

How we the Grekes myghte disavaunce.

まさにギリシャ軍を撃破する計画を話すために。

ordenaunce は ordinance の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。ordinance はラテン語の ordinare (配置する) の派生語 ordinantia が古フランス語経由で英語に入ったもので、チョーサーでは 1 「配置、秩序、神の配剤」(arrangement, order, divine dispensation)、2 「準備、計画」(preparation, plan)、3 「命令」(command) などの意味で使用されている。ordinance は今日では「法令」という意味をもち、上記の意味はおおむね廃義となっている。

*Troilus* での使用回数は 5 回である。

### plyt (=condition)

and knew in good *plyt* was the mone (74)

To doon viage, and took his wey ful sone

Un-to his neces paleys ther bi-syde;

[パンダラスは] 月の位置がいいことがわかったので、すぐ近くの姪の館に急いだ。

plyt は plight の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。plight はラテン語の plicare (=fold 折りたたむ) の過去分詞 plicitum が古フランス語経由で英語に入ったもので、1「折りたたむこと、ひだ」(fold)、2「状態、位置」(condition, position) の意味を持つ。チョーサーでは 2「状態、位置」の意味で使用されている。別語であった plight (危険) の影響で、plyt, plite は plight と綴られるようになり、16 世紀には plight の綴りが plite に取って代わった。今日では 1「折りたたむこと、ひだ」の意味では plait (おさげ、ひだ) と綴られている。

*Troilus* での plyt の使用回数は 10 回である。

### prees (=crowd)

I wol have no wyte,

To bringe in *prees* that mighte doon him harm (1649)

Or him disesen,

私は大勢の人を連れ込んで彼の健康を害したとか、お気持ちを乱したとかいって責められたくはない。

prees は press の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。press には「混み合っていること、大勢」(crowd) の意味があり、*Troilus* ではこの意味で使用されている。この意味は今日では古語となっている。

*Troilus* での名詞としての使用回数は prees が 4 回、presse が 1 回である。

### proces (=discourse, argument)

What sholde I lenger *proces* of it make? (292)

どうしてこれ以上議論する必要があるだろうか。

proces は process の 14 世紀から 17 世紀にかけて見られる綴り。proces は *Troilus* では他の意味のほか、「話、議論」(*OED*: 4. a. A narration, narrative;

relation, story, tale; a discourse or treatise; an argument or discussion) の意味で使用されている。この語義は今日では廃義となっている。

*Troilus* での *proces* の使用回数は 12 回である。

### pro (=profit)

Eek other thing that toucheth not to here,  
He wol me telle, I woot it wel right now,  
That secret is, and for the tounes *pro*. (1664)

私は今よく分かっているんですが、彼女には関係のない町の利益になる秘密事項も、彼は私に語ってくれるでしょう。

*pro* は「利益」(profit) の意味。この語は今日では廃語で、*OED* による最後の用例は c1557 年のものである。

*Troilus* での使用回数は 3 回である。

### prys (=price, praise, prize)

After compleynt, him gonne they to preyse,  
As folk don yet, whan som wight hath bigonne  
To preyse a man, and up with *prys* him reyse (1585)  
A thousand fold yet hyer than the sonne: ..

誰か一人がある人を褒め始めると皆がそうするように、気の毒がった後、皆は彼をほめ始め、賞賛で太陽よりも千倍も高く褒めそやした。

*prys* は *price* の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。*price* はラテン語の *pretium* (価値、価格) が古フランス語 *pris* 経由で英語に入ったものである。チョーサーの英語では *prys* は、1「価格」(price)、2「賞賛、価値、名誉、名声」(praise)、3「賞」(prize) のすべての意味で使用されている。*pris* は *i* が長音であることを

示すために、語尾に e を添えて *prise* と書かれるようになり、その後 s が有声音でなく、無声音であることを示すために *price* と書かれるようになった。

*prys* は、最初、今日の *price*, *praise*, *prize* の三者の意味をもった語であった。しかし 15 世紀には同語源語 *preisen* から *praise* という語が作られて、「賞賛、価値」の意味を担うようになると、*prys* の方はこの「賞賛、価値」という意味を捨てた。さらに 16 世紀に *prys* の異形である *prize* が「賞」という意味を担うようになると、*prys* は今度はこの「賞」という意味も捨てることになり、結局、*prys* すなわち *price* には「価格」という意味だけが残った。

*Troilus* での *prys* の使用回数は 6 回である。

#### *purveyaunce* (=foresight, etc.)

O god, that at thy disposicioun

Ledest the fyn by Iuste *purveyaunce*, (527)

正しい摂理によって人間の最期を御心のままに導き給う神様、

*purveyaunce* は *purveyance* の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。*purveyaunce* はラテン語の *providentia* (先見の明、摂理) に由来する語で、その点、同じく *providentia* に由来する同系語 *providence* と意味が類似している。

*purveyaunce* は今日では「調達」という意味であるが、チョーサーでは 1「先見の明、摂理」(*foresight*, *providence*)、2「調達、準備、備品」(*preparation*, *provision*)、3「分別」(*prudence*) などの意味で使用されている。

*Troilus* での使用回数は 10 回である。

#### *pyne* (=suffering)

I have so greet a *pyne* (1165)

For love, that every other day I faste

ぼくは大きな恋の苦しみを抱えているので、一日おきに断食をしているんだ。

pyne は pine の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。pine は今日では動詞として「思い焦がれる、憔悴する」という意味で用いられる語であるが、語源的にはラテン語の poena (罰) にさかのぼる語である。チョーサーでは「苦しみ、苦痛」(suffering, pain) という意味で用いられている。同じくラテン語 poena (罰) に由来し、pine よりもすこし遅れて英語に入った同語源の語 pain も、チョーサーでは peyne という綴りで 1「苦しみ、苦痛」(suffering, pain)、2「罰」(punishment)、3「努力」(endeavour) などの意味で使用されている。

*Troilus* での使用回数は pyne が 9 回であり、一方、peyne は 58 回、peynes が 12 回である。

### reed (=advice, etc)

And to Pandarus reed gan al assente, (1539)

パンダラスの忠告に全員が同意した。

reed は rede の 13 世紀から 17 世紀にかけて見られる綴り。チョーサーでは reed は、1「忠告」(advice)、2「計画、決定」(plan, decision)、3「助け」(help) などの意味で使用されている。この rede という語は元来 read (読む) と同一語であったもので、意味によって形態の分化が起こったものである。

rede (忠告) は OE および ME 初期には頻繁に用いられた語であった。そして 17 世紀初頭まで文語においては使用され続けていた。その後すたれたが、19 世紀に古語・詩語として復活した。

今日「忠告」を意味する advice は、チョーサーでは avys (意見、忠告) という形で現れる。名詞 avys は *Troilus* で 3 回使用されている。reed の使用回数は 13 回である。

### routhe (=pity)

Lord! Have *routhe* up-on my peyne, (523)

神様、私の苦しみを憐れんでください。

*routhe* は *ruth* の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。チョーサーでは *routhe* は、1「あわれみ、同情」(pity)、2「悲しみ」(grief)、3「残念なこと」(a pity) などの意味で使用されている。

*Troilus* での *routhe* の使用回数は 29 回である。一方、*pitee* (=pity あわれみ) は 12 回使用されている。

### savacioun (=salvation)

And god so wis be my *savacioun*, (381)

神に誓って (= 神が私を救済くださいますように)

*savacioun* は *salvation* (救済) の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。*Troilus* ではこの綴りが用いられている。

*Troilus* での使用回数は 5 回である。

### sawes (=speech)

If that they ferde in love as men don here,

As thus, in open doing or in chere,

In visitinge, in forme, or seyde hire *sawes*: (41)

もしかりに彼らがこの国の人たちと同じ恋の仕方をすれば、たとえば表だった行動や表情、訪問、形式、あるいは言葉遣いにおいて。

今日「ことわざ、格言」を意味する *saw* は、チョーサーではこれらの意味の他に、「ことば、発言」(speech, saying) という意味で使用されている。この *saw* は

say (言う) と同系語である。

*Troilus* での使用回数は sawes が 2 回、sawe が 1 回である。

sikernesne (=security)

Sholde I now love, and putte in Iupartye

My *sikernesne*, and thrallen libertee? (773)

今恋をして、確かな境遇を危うくし、自由を拘束していいものかしら。

*sikernesne* (=sickness) はラテン語の *securus* (=secure) に由来する語で、「安全、確かな状態」(security) の意味。

*Troilus* では *sikernesne* が 7 回使用されている。

skile (=reason, cause)

Lo, this request is not but *skile*, y-wis, (365)

この頼みは確かに理にかなったことだ。

*skile* は *skill* の 12 世紀から 15 世紀にかけて見られる綴り。*skill* の「技術」という意味が一般的となったのは 16 世紀以降のようで、古くは 1「理性、道理、理にかなったこと」(reason)、2「理由、原因」(reason, cause) というのがその基本的な意味であり、チョーサーもこれらの意味で *skile* を用いている。

*Troilus* での *skile* の使用回数は 2 回である。一方、*resoun* (=reason) は 10 回、*resoun* は 2 回使用されている。

soun (=sound)

And who may stoppen every wikked tonge,

Or *soun* of belles whyl that they be ronge? (805)

悪口や鳴り響く鐘の音を止められる人がいるかしら。



*soun* は *sound* (音) の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。この語はラテン語の *sonus* (=sound 音) に由来し、古フランス語の *son* や Anglo-French の *soun* 経由で英語に入ったもので、もともと語尾の *d* は存在しなかった。語尾の余分な剰音 *d* が確立したのは 16 世紀においてであった。勿論、チョーサーの時代には語尾の *d* はなく、チョーサーでは *soun* 形が用いられている。

*Troilus* での名詞 *soun* の使用回数は 4 回である。

### *syk* (=sigh)

And with a *syk* she seyde him at the laste, (145)

とうとうため息をつきながら彼女は言った。

*syk* は *sigh* (ため息) の 13 世紀、14 世紀に見られた別形。

*Troilus* では名詞 *syk* が 6 回、*sykes* が 11 回使用されている。動詞に関しては、*syke* が 15 回、*syked* が 3 回、そして *sighed* が 1 回使用されている。

### *tene* (=ill-will, trouble)

So shoop it, that hym fil that day a *tene* (61)

In love,

その日は恋の苦悩が彼を襲うことになった。

*tene* は *teen* の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。 *teen* は 1「危害」(harm)、2「いらだち、怒り、悪意」(irritation, anger, ill-will)、3「苦悩、悲しみ」(suffering, trouble, grief) などの意味を持っていたが、チョーサーでは 2 と 3 の意味で用いられている。1 の語義は今日では廃義となっており、2 の語義は今日ではスコットランド方言であり、3 の語義は古語となっている。

*Troilus* での *teen* の使用回数は 7 回である。

thrift (=success, profit)

'Good *thrift* have ye,' quod Eleyne the quene. (1687)

「ご成功を」と王妃ヘレンは言った。

*thrift* は *thrive* (繁栄する) の名詞形で、チョーサーでは、1「繁栄、成功、運」(prosperity, success, fortune)、2「利益」(profit) の意味で使用されている。*thrift* は今日では「儉約」を意味するが、この意味は 16 世紀からのもので、*OED* による初出は 1553 年のものである。

*Troilus* での名詞 *thrift* の使用回数は 8 回である。

throwe (=time, while), throwes (=torments)

Now lat us stinte of Troilus a *throwe*, (687)

さてトロイラスのことはしばらく置いておきましょう。

So were his *throwes* sharpe and wonder stronge. (*Troilus* V. 1201)

彼の苦悶は鋭く、強烈であった。

*throw* は 16 世紀まで使用された語で、「(短い) 時間」(space of time, while) または「機会」(occasion) の意味で、*many a throwe* では「しばしば」(often) という意味になる。

上記 2 番目の用例にある *throwes* は、実は、「時間」という意味の *throw* とは別語であって、今日 *thro*e (激痛、苦悶) と綴られている語である。この *throwes* は *Troilus* で 2 回使用されている。

*throwe* (時間) の *Troilus* での使用回数は 10 回である。なお、*Troilus* で同じ「時間」の意味の名詞 *whyle* は 18 回、*while* が 1 回使用されている。

tweye, tweyne (=two)

the king hath sones *tweye*, (170)

王には二人の息子がいる。

With that com he and al his folk anoon

An esy pas rydinge, in routes *tweyne*, (620)

するとすぐに彼と仲間たちが二隊に分かれてゆっくと馬を進めてやって来た。

god save hem bothe *two*! (163)

神様がお二人をお守り下さいますように。

*Troilus* では「二」(two) を表すのに 3 種類の語が使用されている。それらは *two*, *tweye*, *tweyne* である。*tweye* は、*two* の別形 *tway* の 13 世紀から 15 世紀にかけて見られる綴りで、*tweyne* は、やはり *two* の別形 *twain* の 13 世紀から 15 世紀にかけて見られる綴りであった。これらの使用頻度を表にすると次のようになる。

*Troilus* における「二」を表す語の使用回数

<i>two</i>	<i>tweye</i>	<i>tweyne</i>
58	24	16

wawe (=wave)

Out of these blake *wawes* for to sayle, (1)

O wind, O wind, the weder ginneth clere;

この暗い波を抜けて航海するためなのか、風よ、風よ、天候は晴れ始めた。

英語では「波」を表す語は本来 *waw* という語であった。しかし、16 世紀に現れた *wave* という語によって *waw* は取って代われ、*waw* は消滅した。当然、チョーサーの時代には *wave* という語は存在せず、*Troilus* では *wawe* が使用されている。

*Troilus* での使用回数は *wawes* が 2 回である。

### weder (=weather)

O wind, O wind, the *weder* ginneth clere: (2)

風よ、風よ、天候は晴れ始めた。

*weder* は *weather* (天候；荒天) の 12 世紀から 15 世紀にかけて見られる綴り。この *weder* 形が OE から続いていた本来の形であった。15 世紀にスペリングの上にも *d* の代わりに *th* が現れ、16 世紀末までには *th* が一般的となった。しかし、スコットランドやイングランド北西部の方言では今も *d* 音が残っている。当然、チョーサーの時代には *th* を用いた形は存在せず、チョーサーでは *weder* が用いられている。

*Troilus* での使用回数は 3 回である。

### wele (=joy, happiness)

No *wele* is worth, that may no sorwe dryen. (866)

悲しみに耐えられない人は幸福に値しない。

*wele* は *weal* の 12 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。チョーサーでは、1「喜び」(*joy*)、2「幸福、繁栄、成功」(*happiness, prosperity, success*) などの意味で使用されている。*weal* は今日ではその使用は文語に限られる。

*Troilus* での使用回数は 8 回である。

wente (=path, turn)

for which in wo to bedde he wente,

And made, er it was day, ful many a *wente*. (63)

そのため悲しみに包まれて就寝し、夜が明けるまで幾度となく寝返りを打った。

*went* は、*go* の過去形として用いられている *went* の原型 *wend* (行く) と関連のある語で、チョーサーでは、1「道」(*path, way*)、2「回転」(*turn*) の意味で用いられている。

*Troilus* での使用回数は 4 回である。

wight (=person; time)

This knoweth many a wys and worthy *wight*. (180)

このことは賢明で優れた多くの人が知っている。

*wight* は 1「生き物」(*creature*)、「人間」(*person*)、「超自然的存在」(*supernatural beings*)、2「時間」(*time*)、「距離」(*distance*) の意味を持つ語で、チョーサーでもこれらの意味で使用されている。チョーサーでは特に「人」(*person*) の意味での使用が多い。

*wight* は OE では *wiht* という形であったが、この語はドイツ語の *Wicht* (こびと) と同語源である。また *anything* の意味の *aught* は、OE では *awiht* であったが、これは *wiht* (= *wight*) から作られた合成語である。*wiht* には「物」(*thing*) の意味もあったからである。また、否定辞の *not* はもとは *nought* の弱形であったが、この語は OE の *no-wiht* に由来する。*wight* (生き物, 人; 超自然的存在) は今日では古語となっている。

*Troilus* での使用回数は *wight* が 119 回で、*wightes* が 3 回である。

*Troilus* で「人」を表す語の使用回数

wight	man	men	creature	persone
122	94	122	25	5

*Troilus* で「みんな」(everyone, everybody)、を表す表現の使用回数

every wight	everchoon	every man	every creatue
30	10	3	5

(注) everchoon は everichon, everichone の綴りを含む

*Troilus* で「誰も～ない」(no one, nobody)、を表す表現の使用回数

no wight	no man	no creature
29	14	1

**wone (=habit)**

Which alwey for to do wel is his *wone*, (318)

絶えず善行を施すことが習慣になっている、

*wone* は「習慣」(habit, custom) という意味で、*wont* (...するのを常とした) と同系語である。

*Troilus* での使用回数は 2 回である。

**wreche (=vengeance, torment)**

Our *wreche* is this, our owene wo to drinke. (784)

私たち女性に出来る復讐といえ、自分の悲しみを飲み干してしまうことなんだわ。

wreche は 16 世紀まで使用された語で、1「復讐、罰」(vengeance, punishment)、2「苦しみ、苦痛」(torment) の意味で使用されている。この名詞は今日廃語であるが、動詞の *wreak* (復讐する) は今日でも使用されている。*wreche* は *wreak* の他、*wrack* (破滅)、*wreck* (難破、難破船)、*wretch* (哀れな人、[原義] 追放された人) などの語とも同系語である。

*Troilus* での使用回数は 3 回である。

### wyke, wouke (=week)

I shal no-more come here this *wyke*, (430)

今週はもうここに来ないことにするよ。

For dredeles, with-inne a *wouke* or two, (*Troilus* IV. 1278)

I shal ben here;

必ず一、二週間のうちにここに戻って参ります。

*wyke* は *week* (週) の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる形で、*wouke* は 13 世紀から 15 世紀にかけて見られる形であった。*week* という語は OE では *wice* であったが、語頭の *w* 音の影響で次の母音がいろいろ変化した形が生まれた。Skeat 版 *Troilus* では *wyke* と *wouke* とが用いられている。今日の *week* という綴りは 16 世紀以降のものである。

*Troilus* での使用回数は *wyke* が 2 回、*wouke* が 2 回、*woukes* が 1 回である。

### wyse (=way, manner)

And sette him doun, and wroot right in this *wyse*. (1064)

【トロイラスは】腰を下ろして、このように書いた。

wise (方法) を用いた in like wise (同じように) のような表現は、今日では古語となっているが、このような表現は *Troilus* では多用されていて、全部で 54 回見られる。そのうちの多くは行末の脚韻語となっている。wise はドイツ語の Weise (方法) と同語源で、英語の in this wise はドイツ語の auf diese Weise (この仕方、このように) に対応する。

in this wyse のように前に前置詞が付く場合と、any wyse のように前置詞が付かない場合とがあるが、大部分は前置詞が付いた形である。*Troilus* では前置詞が付かないものは 3 回と少なく、残りの 51 回では前置詞が用いられている。前置詞の大部分の 49 回は in であり、2 回では on が使用されている。

(a) 前置詞 in が付いたもの

in a besy wyse / in a ful secree wyse / in a grisly wyse / in a sobre wyse / in a wonder cruel wyse / in al hir beste wyse / in al hir goodly softe wyse / in any wyse / in curteys wyse / in diverse wyse / in every humble wyse / in ful humble wyse / in good wyse (2 回) / in his beste wyse (2 回) / in his briddes wyse / in no sodeyn wyse / in no wyse / in so discreet a wyse / in so short a wyse / in so unkouth wyse / in som wyse (2 回) / in sondry wyse (3 回) / in swich a wyse / in swich wyse / in the same wyse / in the wyse / in this wyse (13 回) / in thrifty wyse / in what maner wyse / in what wyse so yow leste / in wyse of curteisye / in that selve wyse

(b) 前置詞 on が付いたもの

on any wyse / on this same wyse

(c) 前置詞が付かないもの

non other wyse / ofte wyse / any wyse

in swich a wyse と in swich wyse のように、一方では不定冠詞 a があるのに、他方ではないというような場合があることが分かる。



**wyte (=blame)**

for I wol have no *wyte*, (1648)

To bringe in prees that mighte doon him harm

私は大勢の人を連れ込んで、彼の体に障ることをしたといって責められたい  
ないんです。

wite または *wyte* は、1「罰」(punishment)、2「非難」(blame) の意味を持つ  
語で、今日では 1 の意味では古語であり、2 の意味ではスコットランド方言とな  
っている。チョーサーでは 2 の「非難」の意味で使用されている。

*Troilus* での名詞 *wyte* の使用回数は 2 回である。

## V. 動詞

### 目次

agaste (=frighten) / agoon, ago (=gone; ago) / arede (=guess; explain) /  
astonied (=stunned, astonished) / avyse (=look at; consider) / axe (=ask) /  
bidde (=pray) / biwreye (=bewray, reveal) / blende (=blind, deceive) /  
brenne (=burn) / breste (=break, burst) / caste (=calculate, consider) /  
chese (=choose) / clepe (=call, name) / com of (=come on, hurry up) /  
defende (=forbid) / devyse (=describe, contrive, etc.) / disesen (=disturb) /  
do wey (=cease) / do (=make) / dress (=prepare, etc.) / dryen (=endure,  
suffer) / dwelle (=delay, etc.) / fallen (=happen, etc.) / flete (=float, drift) /  
fonde (=try) / fyne (=stop, finish) / ginne, gan (=begin, did) / hente (=seize) /  
highte (=promise, be called) / lere (=teach; learn) / lese (=lose) / lette  
(=prevent) / leve (=allow, grant) / leve (=believe) / like (=please) / list, lest  
(=please) / longe (=befit, belong; desire) / mete (=dream) / mote, moot  
(=must) / mowe (=be able) / 否定辞 ne と動詞(助動詞)との結合形 /  
pleyne (=complain) / quod (=said) / recche (=care) / rede (=advise, guide) /  
saluwe (=salute) / say (=saw) / seche (=seek) / shape (=destine, etc.) /  
shenden (=disgrace, ruin, etc.) / spede (=succeed, cause to succeed) / sterve  
(=die) / stinte (=stop) / syke (=sigh) / thar (=it is necessary) / thenke  
(=think) / think (=seem; think) / 分離を表す接頭辞 to- / triste (=trust) /  
trowe (=believe) / wene (=think) / wex (=grow) / wite (=know) / wrye  
(=cover; =go) / wyte (=blame) / yeve, yif (=give) / 接頭辞 y-

#### agaste (=frighten)

And ay gan love hir lasse for to *agaste* (901)

Than it dide erst,

次第に恋というものが最初ほど彼女を怖がらせることはなくなっていった。

agaste は aghast の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。16 世紀以降は aghast と綴られるようになり、今日では過去分詞 aghast (仰天して) が形容詞としてのみ用いられている。元は「おびえさせる」(frighten) の意味の動詞であった。チョーサーではこの意味で使用されている。

*Troilus* での使用回数は agaste が 1 回、agast が 6 回である。

#### agoon, ago (=gone; ago)

For of this world the feith is al *agoon*! (410)

この世から誠実というものがすっかりなくなってしまった。

ago (～前に) はもともと ago という動詞の過去分詞であった。動詞 ago は go という動詞に、away を意味した接頭辞 a- が付いた複合語であり、1「(時間が) 過ぎ去る」(pass away)、2「去る」(go away) を意味した。この動詞は 1300 年以降はあまり使用されなくなり、一般には過去分詞の ago, agone のみで使用されるだけとなった。agone (=gone by) の短縮形 ago が 14 世紀末に方言に現れ、そして Caxton 以降 ago の形が標準形となった。agone の方は方言に残り、今日でも古語・詩語として使用される。

チョーサーでは agoon または ago は、'gone; gone away; past; ago' などの意味で使用されている。*Troilus* での使用回数は agoon が 7 回、ago が 2 回である。

#### arede (=guess; explain)

My wit is for to *arede* it al to lene; (132)

それを説明するにはわたしの頭では貧弱すぎる。

arede は aread の別綴り。接頭辞 a (=out) と read との合成語で、チョーサーでは 1「推測する」(guess)、2「解釈する、説明する」(interpret, explain) の意味で使用されている。

*Troilus* での使用回数は 4 回である。

**astonied (=stunned, astonished)**

For so *astonied* am I that I deye! (427)

わたしは気が顛倒して息も絶え絶えですから。

今日では *astonied* は「茫然として」という意味の古語である。ラテン語の \**extonare* (*ex* out + *tonare* to thunder) に由来する古フランス語 *estoner* (現代フランス語 *étonner* 驚かせる) が *astony* (茫然とさせる) として英語に入ったもの。別形に *astone* (茫然とさせる、ひどく驚かす) という動詞がある。16 世紀には *astonish* というさらに別形が生じた。チョーサーの時代には *astonish* はまだ存在していなかった。

*Troilus* での *astonied* の使用回数は 2 回である。

**avyse (=look at; consider)**

Lord! So faste ye me *avyse*! (276)

まあ、そんなに私をじっとご覧になって。

And in to a closet, for to *avyse* hir bettre, (1215)

She wente allone,

よく考えたいものだと、彼女は一人自室に入った。

*avyse* は *advise* の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。*avise* (=avyse) は、後期ラテン語 *advisare* に由来するフランス語 *aviser* からの借用語である。15-16

世紀に中期フランス語にあったスペリング *adviser* (気づく、考察する) の影響で *advise* という形になった。

チョーサーにおける *avyse* の意味は、「見る」(look at)、「考察する」(consider) である。再帰用法で「考察する」(consider) という意味に用いられる場合もある。過去分詞の *avysed* で「考えて」(having considered)、「決心して」(determined) などの意味で用いられ、「用心して」(wary)、「気づいて」(aware) など形容詞に近い意味でも用いられている。

どういふわけか、今日の「忠告する」という意味ではチョーサーは *avyse* を用いていないようである。「忠告する」という意味の語としてチョーサーは *rede* を用いている。

*Troilus* での使用回数は *avyse* が 6 回、*avysed* が 7 回、*aviseth* が 1 回、*avyseth* が 1 回である。

### axe (=ask)

Til she gan *axen* him how Ector ferde, (153)

やがてクリセイデは彼にヘクトルの近況を尋ねた。

*axe* は *ask* の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られた別形。*axe* は 1600 年頃までは文語の標準形であったもので、今日でも中部、南部の方言では使用されている。標準語では *ask* によって取って代わられたが、この *ask* は本来北部の方言であった。

*Troilus* では *axe* と *ask* の両方が使用されている。*axe* は 12 回 (*axe* が 2 回、*axen* が 6 回、*axeth* が 2 回、*axed* が 2 回) 使用され、一方、*ask* は 9 回 (*aske* が 2 回、*asked* が 4 回、*asken* が 2 回、*asketh* が 1 回) 使用されている。

*Confessio Amantis* では、*ask* が 8 回 (*aske* が 1 回、*asken* が 1 回、*asketh* が 5 回、*askinge* が 1 回) 使用され、*axe* が 146 回 (*axe* が 39 回、*axeth* が

75 回、axen が 8 回、axed が 10 回、axede が 2 回、axinge が 9 回、axinges が 2 回) 使用されている。

*Troilus* と *Confessio Amantis* における ask と axe の使用回数

	<i>Troilus</i>	<i>Confessio Amantis</i>
ask およびその変化形	9 (43%)	8 (5%)
axe およびその変化形	12 (57%)	146 (95%)

上の表から *Confessio Amantis* では ask 形が少なく、axe 形が圧倒的に多用されていることが分かる。これはガワーが南部の英語を使用していたためだと思われる。

bidde (=pray)

But swich a nede was to preye him thenne,

As for to *bidde* a wood man for to renne. (1554)

しかしそのとき彼にそのようなことを依頼する必要がなかったのは、狂人に走れと命じる必要がないのと同じだった。

bidde や bede は、bid の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。bid はチヨースーでは、1「頼む」(beg, ask)、2「命令する」(command)、「言う」(tell)、3「願う」(wish, desire) などの意味で使用されている。

bid は実は元々別の 2 語、OE の beodan (=command, announce) と OE の biddan (=beg, pray) が、混同されて 1 語となったものである。beodan の ME における通常の形は bede(n) で、biddan の ME における通常の形は bidde(n) であった。1400・1500 年以後にはこの混同は完全なものとなって、両者の区別が付かなくなった。bode (～の前兆となる) は同系語である。

*Troilus* での使用回数は、bid が 2 回、bidde が 10 回、biddest が 1 回、

biddeth が 3 回、bede が 2 回、bad が 11 回、boden が 1 回である。

biwreye (=bewray, reveal)

It is oon of the thinges that furthereth most,

A man to have a leysar for to preye,

And siker place his wo for to *biwreye*: (1370)

男が求愛の機会と、悲しみを打ち明ける安全な場所を持つことが、恋愛を一番進めるものの一つである。

biwreye は bewray (=reveal 暴露する、うっかり漏らす) の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。bewray は今日では古語となっている。

*Troilus* での使用回数 2 回である。

blende (=blind, deceive)

And how that he Deiphebus gan to *blende*: (1496)

彼がデーイフォバスを欺いたことを、

blende は「盲目にする、～の目をくらます」(make blind)、「欺く」という意味。blende が用いられたのは 1600 年頃までで、やがて blind (盲目にする) に取って代わられた。

*Troilus* での使用回数は、blende が 6 回、blent が 2 回、blente が 1 回である。

brenne (=burn)

So through this lettre, which that she him sente,

Encresen gan desyr, of which he *brente*. (1337)

クリセイデが送った手紙によって欲望は増大し、それによって彼は身を焼く

思いがした。

*brenne* は *burn* (燃える、焼く) の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。*burn* は OE の他動詞 *bærnan* (燃やす) と OE の自動詞 *beornan* (燃える) という二つの別の動詞が一つになったものである。ME 後期から 16 世紀までは音位転換形の *brenne* が最も一般的な形であった。16 世紀以降今日の *burn* 形が優勢となった。チョーサーでは *burn* 形は使用されていない。

*Troilus* での使用回数は、*brenne* が 3 回、*brennen* が 1 回、*brenneth* が 1 回、*brende* が 7 回、*brente* が 1 回、*brent* が 1 回、*y-brend* が 2 回、*brenningly* が 1 回である。

#### *breste* (=break, burst)

And she to-laugh, it thoughte hir herte *breste*. (1108)

彼女は笑い崩れて心臓が裂けるかと思われた。

*breste* は *burst* の 14 世紀、15 世紀に見られる形。チョーサーでは *breste* は 'break, burst' の意味で使用されている。

*burst* は音位転換が交互した語であり、西ゲルマン語での形は *brēst-* であったが、OE では *berstan* となり、ME では音位転換形の *bresten* が主流で、16 世紀末以降は *burst* 形が優勢となった。ME 期にも *burste* 形は存在したが、チョーサーでは使用されていない。

*Troilus* での使用回数は、*breste* が 9 回、*bresten* が 1 回、*to-breste* が 2 回、*out-breste* が 2 回、*brosten* (*broken*) が 1 回、*brast* が 2 回、*braste* が 2 回である。一方、*break* という語の方は、*breke* が 5 回、*breken* が 2 回、*breketh* が 1 回使用されている。



*Troilus* での *breste* と *breke* の使用回数

<i>breste</i> 等	19
<i>breke</i> 等	8

*caste* (=calculate, consider)

And as they *casten* what was best to done, (1485)

彼らが最善の方策を考えているとき、

チョーサーでは *cast* は今日と同じ「投げる」(throw) という意味のほか、1「計算する」(calculate, reckon)、2「考える、決心する」(consider, contrive, decide) という意味で使用されることが多い。

*Troilus* での使用回数は、*caste* が 32 回、*casten* が 4 回、*cast* が 6 回である。

*chese* (=choose)

Of harmes two, the lesse is for to *chese*; (470)

二つの不幸のうち小さい方を選ぶべきだ。

*chese* は *choose* (選ぶ) の 12 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。現在形としての *choose* は 16 世紀頃以降の形である。チョーサーでは現在形としては *chese*, *cheese* が使用されている。

*Troilus* での使用回数は、*chese* が 4 回、*chees* が 1 回である。

*clepe* (=call, name)

The nightes fo, al this *clepe* I the sonne, (905)

夜の敵、このような名でわたしは太陽を呼ぶ。

clepe は「呼ぶ」(call)、「名づける」(name) の意味の語で、今日では古語である。

*Troilus* での使用回数は、clepe が 9 回、cleped が 2 回、clepeth が 2 回、y-cleped が 2 回、clepinge が 1 回である。一方、ほぼ同義の call に関しては、calle が 15 回、callen が 2 回、called が 8 回、calling が 1 回使用されている。

*Confessio Amantis* では、clepe が 22 回、cleped が 110 回、clepen が 13 回、clepeth が 8 回使用されている。一方、call に関しては、calle が 39 回、calleth が 7 回使用されている。

*Troilus* と *Confessio Amantis* での clepe と calle の使用回数

	<i>Troilus</i>	<i>Confessio Amantis</i>
clepe 等	16 (38%)	153 (77%)
calle 等	26 (62%)	46 (23%)

com of (=come on, hurry up)

*come of now, if ye conne;* (1742)

さあさあ急ぐんだ、もしできるなら。

come of は 'come off' と同じで、これは今日の 'come on' (さあ、早く早く) と同じ意味である。OED の come の 65. come off の項に 'Formerly in imperative as a call of encouragement to action: come! come along! come on! *Obs.*' と説明されている用法である。この 'come off' は Skeat 版 *Troilus* ではすべて 'come of' と綴られている。

*Troilus* でのこの 'come off' の使用回数は 3 回である。

defende (=forbid)

I conjure and heighly yow *defende*,... (1733)

Slee nought this man,

頼むから、あの方のお命をうばうなんてことはしないでくれ。

defend には今日と同じ「防衛する」、「守る」などの意味の他に、今日では古語となっている「禁ずる」(forbid) の意味の用法があった。

*Troilus* での使用回数は、defende が 5 回、defendeth が 1 回である。

devyse (=describe, contrive, etc.)

And gonne a while of this and that *devyse*. (1599)

【各人は】しばらくあれやこれやについて語った。

今日「案出する」を意味する devise は、チョーサーでは様々な意味において用いられている。1「ことばで述べる」(describe)、「語る」(relate)、2「想像する」(imagine)、「考える」(consider)、3「計画する」(plan)、「案出する」(contrive) などの意味での使用が見られる。

*Troilus* での devyse の使用回数は 38 回である。

dise(n) (=disturb)

for I wol have no wyte,

To bringe in prees that mighte doon him harm

Or him *disenen*, (1650)

大勢の方をお連れして、お体に障ったとか、ご不快にしたとかいって責められたくないからです。

dise(n) は disease の 14 世紀、15 世紀に見られる綴り。チョーサーでは動詞 dise(n) は、「不快にする」(make uncomfortable)、「～の気持ちを乱す」(disturb) の意味で用いられている。これらの意味は今日では廃義である。

*Troilus* での動詞 *disease*(n) の使用回数は、*disease* が 2 回、*diseasen* が 2 回、*diseased* が 2 回である。

### do (=make)

And we shal speke of thee som-what, I trowe,

Whan Thou art goon, to *do* thyne eres glowe! (1022)

お姿が見えなくなったら、なにかあなたのお噂をして、お耳を熱くさせますよ。

*do* には今は廃義になっている用法で、*make* や *cause* に相当する「～させる」という使役の用法があった。*OED* で *do* の 22、23 の項に説明されている用法である。

*He did them come.* (=He made them come. 彼は彼らを来させた) のように *to* のない不定詞が続くこともでき、また *to* のある不定詞が来て、*He did them to come.* のように言うこともできた。*do somebody to wit [know, understand]* では「知らせる」(*cause somebody to know*) の意味となった。また、受動態の不定詞が続いて、*do him (to) be slain* (彼を死なせる) という表現もあった。この場合も、*to* を用いても、用いなくても、どちらでもよかった。

また、不定詞の意味上の主語になる目的語を省略する言い方もあった。*do bind him* (= *make somebody bind him* 彼を縛らせる) のような表現である。この場合、不定詞には通例、自らの目的語を持った他動詞が用いられた。フランス語の *faire lier* やドイツ語の *binden lassen* に相当する表現である。

### do wey (=cease)

Do wey your book, rys up, and lat us daunce, (111)

本は片付けて、立ち上がって、踊ろうじゃないか。

*Do wey, do wey, they woot no-thing of this!* (893)

よして頂戴、あの人たちは恋愛というものが分っていないんだわ。

do には「置く」(=put) という意味があり、また wey (=way) は away の意味で、do wey で 'put away, leave off' などの意味の熟語となる。

*Troilus* での do wey の使用回数は 4 回である。

### dress (=prepare, etc.)

*And gan to calle, and dresse him up to ryse,* (71)

[パンドラスは] 声を上げて、起きる用意をした。

dress はチョーサーでは今日よりも様々な意味で使用されている。1 (他動詞、再帰動詞、自動詞として)「準備をする」(prepare) の意味で使用されることが一番多い。また、2 dress him up で「起きあがる」(raise oneself up) という意味になった。3「導く」(direct)、(再帰動詞、自動詞で)「行く」(go) という意味になることもあった。

*Troilus* での使用回数は、dresse が 5 回、dressede が 1 回である。

### dryen (=endure, suffer)

*No wele is worth, that may no sorwe dryen.* (866)

悲しみに耐え得ない人は幸福に値しない。

drye は dree の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。dree は「我慢する、こうむる」(endure, suffer) の意味で使用される。今日ではスコットランド方言または古語である。

*Troilus* での使用回数は、drye が 4 回、dryen が 2 回、dryeth が 1 回である。

dwelle (=delay, etc.)

'... What sholde I lenger,' quod he, 'do yow *dwelle*?' (1614)

「長時間お引きとめはしません」と彼は言った。

*dwelle* は今日一般的な意味である「住む」、「とどまる」などの他に、チョーサーでは「ぐずぐずする」(*delay*)、「存続する」(*persist*) の意味で使用されることがあった。

*Troilus* での使用回数は、*dwelle* が 32 回、*dwellen* が 2 回、*dwelleth* が 2 回、*dwelled* が 1 回である。

fallen (=happen, etc.)

And for the harm that mighte eek *fallen* more,

She gan to rewe and dredde hir wonder sore; (455)

このうえさらに危害が起こるかも知れないと思い、彼女は気の毒に思い、ひどく心配し始めた。

*fall* は今日も用いられる意味の他、チョーサーでは「起こる」(*befall*, *happen*) の意味でも用いられている。

*Troilus* での *fall* の使用回数は、*falle* が 31 回、*fallen* が 12 回、*falleth* が 3 回、*falling* が 2 回、*fallinge* が 1 回、*file* が 3 回、*fillen* が 2 回、*felle* が 4 回、*fellen* が 2 回、*fil* が 15 回、*y-falle* が 1 回で、計 76 回である。一方、*befall* に関しては、*bifalle* が 4 回、*bifallen* が 1 回、*bifalling* が 1 回、*bifallinge* が 1 回、*bifel* が 5 回、*bifalle* が 4 回、*bifallen* が 1 回、*bifalling* が 1 回、*bifallinge* が 1 回で、計 19 回使用されている。

flete (=float, drift)

And ful of bawme is *fleting* every mede; (53)

牧場という牧場にはいい香りが漂っていた。

*flete* は *fleet* の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。*fleet* は今日、形容詞として詩語で「速い」という意味で用いられたり、動詞として「(雲などが) 素早く動く」、「(時が) 流れ去る」という意味を持つ語である。元来は、ドイツ語の *fliessen* (=flow 流れる) と同語源の語であり、「浮かぶ」(*float*)、「漂う」(*drift*) という意味であった。チョーサーでもだいたいこの意味で用いられている。また、「満ちあふれる」(*abound, overflow*) という意味で用いられることもある。上記の用例ではこの「満ちあふれる」の意味である。チョーサーは、*fleet* と同義の *float* と言う語は使用していないようである。

*Troilus* での使用回数は、*flete* が 2 回、*fleting* が 1 回である。

#### *fonde* (=try)

For thy hir wit to serven wol I *fonde* – (273)

それ故、彼女の頭で分るように話すよう努めよう。

*fond* は今日では廃語であり、チョーサーでは「試みる」(*try*) (*OED fond. 5: To attempt, try. Const. to with inf.*) の意味で使用されている。

*Troilus* での使用回数は 5 回である。

#### *fyne* (=stop, finish)

And took his leve, and never gan to *fyne*, (1460)

But to his neces hous, as streyt as lyne,

He com;

【彼は】別れを告げ、止まることなく姪の家までまっすぐにやって来た。

*fyne* は *fine* の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。*fine* はラテン語

の *finis* (終り) に由来する古フランス語の *finer* が英語に入ったものである。16世紀まで使用されて、廃語となった。自動詞として「終わる」(*end*)、「止まる」(*stop*)、「断念する」(*desist*) の意味を持ち、他動詞として「終える」(*finish*) の意味を持った。

*Troilus* での使用回数は 3 回である。

*ginne, gan (=begin, did)*

And sette hir doun, and *gan* a lettre wryte, (1218)

腰をおろして、手紙を書いた。

and out he *gan* to goon

In to the grete chambre, (1711)

彼は広間に入っていった。

but al hir humble chere

*Gan* for to chaunge, (1130)

彼女の慎ましやかな表情が変り始めた。

*gin* (チョーサーでは *ginne*) は *begin* の語頭音消失形である。意味も *begin* と同じく「始める」であるが、それ以外に、迂言的助動詞として今日の *do* に相当する用法もあった。この場合、原形不定詞が続くことも、*to-* 不定詞が続くこともあった。場合によっては、*to* の代わりに *for to* が用いられることもあった。

頻繁に見られたのが、*gan* などの過去形を、今日の *did* に相当する単に過去を表す助動詞として用いる用法であった。その場合、*gan* には原形不定詞が続くことも、*to-* 不定詞 (あるいは *for to-* 不定詞) が続くこともあった。上記三つの用例では、それぞれ *gan* に原形不定詞、*to-* 不定詞、*for to-* 不定詞が続いている。この用法では、*gan* が単なる過去を表すしるしであるのか、それとも「始める」と言



う意味が残っているのか、判断が難しい場合もある。Mustanoja は、チャージャーでは gan に 'begin' の意味が完全な形で残っている場合は少ないと述べている (Mustanoja, p.613)。また、この gan は韻律を合わせる目的や、gan に続く不定詞に脚韻を踏ませる目的で使用されることが多い (Mustanoja, p.612)。チャージャーでは迂言的用法の助動詞としてはこの gan が多用されていて、迂言的助動詞 do の使用は少ない (Mustanoja, p.614)。

チャージャーの作品の中では gan の使用は *Troilus* においてピークに達した (Mustanoja, p.613)。*Troilus* で gan という形は 293 回使用されているが、そのうちの 1 回は目的語として名詞が続く用例なので除外し、残りの 292 回について、gan に続く不定詞が、原形不定詞、to が付く不定詞、for to が付く不定詞、のいずれであるかの頻度を見たのが次の表である。不定詞が二つ続く場合、最初の不定詞に to が付かず、二つめが for to が付いた不定詞となっている用例が一つ見られるが (Gan *westren* faste, and downward for to wrye, II. 906)、この場合、最初の不定詞にしたがって、to が付かない不定詞に数えた。比較として、*Confessio Amantis* での gan の使用回数を挙げた。なお、*Confessio Amantis* では for to はすべて forto のように一語に綴られている。

*Troilus* と *Confessio Amantis* における gan に続く不定詞の種類

	<i>Troilus</i>	<i>Confessio Amantis</i>
原形不定詞	173 (59%)	39 (44%)
to 不定詞	92 (32%)	46 (52%)
for to 不定詞	27 (9%)	3 (3%)
計	292 (100%)	88 (100%)

(注) 端数を四捨五入しているため%の合計が 100%になっていない場合がある。

*Troilus* での使用回数は、ginne が 2 回、ginneth が 4 回、binning が 1 回、

ginninge が 1 回、gan が 293 回、gonne が 8 回、gonnen が 9 回、gunnen が 1 回であり、計 319 回である。

一方、begin の使用回数は、biginne が 15 回、biginneth が 3 回、biginning が 1 回、bigan が 19 回、bigonne が 8 回であり、計 46 回である。

### hente (=seize)

Til at the laste the dede sleep hir *hente*. (924)

そのうちとうとう深い眠りが彼女を捕らえた。

*hente* は *hent* の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。「つかむ、捕らえる」(seize, catch) の意味である。

*Troilus* での使用回数は *hente* が 7 回、*hent* が 2 回である。

### highte (=promise, be called)

they hir *highten*

To been hir helpe in al that ever they mighten. (1623)

彼らにはできる限りのことをして彼女を助けると約束した。

Up·on hir fo, that *highte* Poliphete, (1616)

ポリフェーテと呼ばれる彼女の敵について、

*hight* は今日その過去分詞が古語・詩語として「～と呼ばれた」(called, named) という意味で残っている語である。チョーサーでは、1「～と呼ばれている」(be called)、2「約束する」(promise) の意味の動詞として用いられている。

*Troilus* での使用回数は、*hatte* が 1 回、*highte* が 5 回、*highten* が 1 回である。

lere (=teach; learn)

this charme I wol yow *lere*. (1580)

このまじないをお教えしましょう。

for wrecches wol not *lere* (*Troilus* III. 934)

For verray slouthe or othere wilful tecches;

劣等生はまさに怠惰だったり、わがままな欠点があったりで、学ぼうとしな  
いんだから。

*lere* は *lore* (知識、教え) の動詞形で、1「教える」(*teach*)、2「学ぶ」(*learn*)  
の意味。今日では *lere* は廃語である。

*Troilus* での使用回数は *lere* が 5 回、*lered* が 1 回、*y-lered* が 1 回である。

lese (=lose)

Yet have I lever maken him good chere

In honour, than myn emes lyf to *lese*; (472)

でも叔父様のお命を失うくらいなら、体面を保ちながら、あの方にいい顔を  
して差し上げますわ。

He seyde, he nas but *loren*, waylawey! (*Troilus* IV. 957)

悲しいかな、ぼくはもうだめだ、と彼は言った。

*lese* は *leese* (失う) の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる綴り。チャーサー  
ーでは過去形単数として *lees*、過去分詞として *lore(n)*、*ylor(e)n* などが使用され  
ている。

*leese* は OE の *leosian* に由来する語で、ドイツ語の *verlieren* (=lose) と同語  
源で、今日の *lose* と同義である。一方、*lose* は OE の *losian* に由来し、元来「滅

びる」の意味であったが、やがて lose と leese は同義語となり、ついには leese は lose によって取って代わられた。

*Troilus* での leese の使用回数は、lese が 8 回で、lesen が 1 回である。

チョーサーでは lose の過去形 loste と過去分詞 lost は使用されているが、現在形の lose は使用されていないようである。*Troilus* での使用回数は、過去分詞 lost が 25 回、y-lost が 2 回、lorn が 9 回、y-lorn が 1 回である。

### lette (=prevent)

Ther-with a thousand tymes, er he *lette*, (1089)

He kiste tho the *lette* that he shette,

そして、封をした手紙に、止めるまで幾度となく口づけした。

*lette* は *let* の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。*let* は他動詞として「妨げる」(*hinder, prevent*) の意味。また、自動詞として「思いとどまる、止める」(*desist, cease*)、「待つ」(*wait*) の意味で用いられた。*let* は名詞としては「妨げること、妨害」の意味となる。*let* (妨げる) は今日では古語となっている。

*Troilus* での動詞 *let* の使用回数は、*lette* が 5 回、*letten* が 3 回、*letteth* が 1 回、*let* が 3 回である。名詞 *lette* は 6 回使用されている。

### leve (=believe)

This false world, allas! Who may it *leve*? (420)

ああ、こんな虚偽の世の中、誰に信じられるだろうか。

*leve* (=believe) はドイツ語 *glauben* (信じる) と同語源の *y-leve* の短縮形である。*believe* は、この *leve* に接頭辞 *be-* が付いたもので、もとは *beleeeve* という形であったが、17 世紀に誤って *believe* と綴られるようになったものである。チョーサーでは *bileve* も使用されているが、*leve* の方が頻度は高い。*bileve* は

*Troilus* では動詞として 1 回、*belief* の意味の名詞として 1 回使用されているだけである。

*Troilus* では *leve* という形は、実はいくつかの同音異義語が同一形になっていて、様々な語である可能性がある。「親愛な」(=*dear*) という意味の形容詞、「許可」(=*permission*) という意味の名詞、「去る、残す」(=*leave*) という意味の動詞、「信じる」(=*believe*) という意味の動詞、「許可する」(=*grant*) という意味の動詞などの場合がある。

*Troilus* で *leve* (=believe) は 16 回使用されていると思われる。

### leve (=allow, grant)

'*De par-dieux,*' quod she, '*God leve al be well!...*' (1212)

彼女は言った、「神様、万事うまくいきますように」

この語は前項の *leve* と同じ形であるが、別語であって、「許可する」(*allow, grant*) の意味である。主語を *God* にした祈願文で用いられることが多い。*leve* の次に目的語 + (to 付き、または to なし) 不定詞が続くことも、あるいは *that* 節が続くこともある。

*Troilus* での *leve* (=grant) の使用回数は 6 回である。

### like (=please)

So whan it *lyked* hir to goon to reste, (910)

彼女が就寝したくなったとき、

*like* は「～に気に入る、喜ばす」(=*please*) の意味で用いられる。与格を伴って非人称構文で用いられることも多い。If it *like* yow. (=If you please.) などの表現である。

チョーサーでも今日の *like* と同様の「好む」という意味の用法もあるにはある

が、大部分は *please* の意味の用法であり、*Troilus* で見られる *lyke* はすべて「～に気に入る」の意味であると思われる。この非人称構文での *like* は今日では古語または方言となっている。

*Troilus* での使用回数は、*lyke* が 12 回、*lyken* が 4 回、*lyketh* が 8 回、*lyked* が 4 回、*liketh* が 1 回である。

*Troilus* では「好む」という意味を表すとき、次の表に見られるように、*lyke* よりも *list* の方が多用されていることが分る。

*Troilus* における *list (=please)* と *lyke (=please)* の使用回数

<i>list</i> 等	117
<i>lyke</i> 等	29

#### *list, lest (=please)*

And every wight out at the dore him dighte,  
 And wher him *liste* upon his wey him spedde; (949)  
 各人はドアから出て、思い思いのところに急いだ。

I have no cause, I woot wel, for to sore  
 As doth an hawk that *listeth* for to pleye, (*Troilus* I. 671)  
 遊び好きの鷹のように空に舞うことができないことはよく分っていますが、

*list* には非人称構文の用法と人称構文の用法とがあった。非人称構文では元來対格または与格の人称代名詞などを伴って、‘be pleasing to’ の意味を持ち、*me list [listeth]* で *I like [care, desire]* の意味となった。不定詞を伴って、例えば *me list not (to) pleye* で、「私は遊ぶ気にならない」の意味になった。しかし、*as, if, what, when* などの中の従属節では不定詞が表現されない ‘but tel me, if thee *liste*,...’ (もしよかったら言ってくれないか) のような表現も多く見られる。

人称構文では、list は 'like, wish, desire' などの意味を持ち、非人称構文の場合と同様、ふつう不定詞 (to 付き、または to なし) を伴ったが、不定詞が表現されないことも多かった。

yow (=you) などの人称代名詞は主格と対格 (または与格) が同形なので、非人称構文なのか人称構文なのか区別が付きにくい場合もあるが、チョーサーでは、list に関しては人称構文よりも非人称構文の方がはるかに多い。

今日では list (気に入る ; 望む、欲する) は古語となっている。

*Troilus* での使用回数は、list が 55 回、liste が 26 回、listen が 2 回、listeth が 3 回、leste が 28 回、lest が 3 回である。

### longe (=benefit, belong; desire)

And dide also his othere observaunces

That to a lovee *longeth* in this cas; (1346)

このような場合に恋人にふさわしい他のおつとめも行った。

And eek me *longeth* it to wite, y-wis. (312)

また知りたくて仕方がないんだもの。

上記二つの例文のそれぞれの *longeth* は実は別の語である。

最初の例文の *longeth* は belong の接頭辞のない形で、「適切である、ふさわしい」(benefit, be appropriate)、「属する」(belong) の意味の語である。この語はその後 belong に取って代われ、今日では long は古語または詩語となっている。

二番目の例文の *longeth* は "Thanne longen folk to goon on pilgrimages" (そのとき人々は巡礼に出かけたくなる) (*The Canterbury Tales*, General Prologue, 12) に見られる longen と同じ語で、desire (欲する) の意味である。この語には与格を伴った非人称構文の用法があり、例文の me longeth は I desire の意味である。

*Troilus* での使用回数は、「適切である、ふさわしい」の意味の longe (*longeth*)

が 2 回、「欲する」の意味の *longe* が 4 回である。

### mete (=dream)

And as she sleep, anoon-right tho hir *mette*, (925)

眠ると、すぐに彼女は夢を見た。

*mete* は 17 世紀まで用いられて廃語となった動詞。普通の人称動詞として「夢を見る」(=*dream*) という意味に用いられ、非人称動詞として与格とともに *me mette* (=I dreamt) 「夢を見た」のように用いられることもあった。

*Troilus* での使用回数は、*mete* が 3 回、*meten* が 1 回、*mette* が 4 回である。

### mote, moot (=must)

Thorough which I woot that I *mot* nedes dyen; (536)

そのため私の命は必ず絶えるだろうと思っています。

So longe *mote* ye live, (402)

長生きされますように。

*mote* は助動詞で、今日の *must* と *may* の意味を持っていた。今日の *must* はこの *mote* の過去形であり、チョーサーでは *moste* という形で用いられている。過去形が接続法過去として現在形の意味を持つようになり、今日では *must* は現在形として使用されている。今日の *may* はチョーサーでは基本的には 'be able, can' の意味であった。

チョーサーでは *mote* は、1 「～してもよい」(*may*)、2 今日の *may* と同様に祈願文で願望を表す「～ならんことを」、3 「～しなければならない」(*must*) の 3 通りの意味で使用されている。



*Troilus* での使用回数は、*mote* が 17 回、*mot* が 27 回、*moten* が 1 回、*moot* が 17 回、*moste* が 34 回、*mosten* が 2 回である。

### mowe (=be able)

For who is that ne wolde hir glorifye,

To *mowen* swich a knight don live or dye? (1594)

このような騎士を生かすことも、死なせることもできることを、誇りに思わない者がいるだろうか。

*mowen* は助動詞 *may* の不定詞形。そのほかチャョーサーでは、*mowe(n)* が直説法現在複数あるいは接続法現在複数で、*mowe* が接続法現在単数で用いられている。直説法現在 1 人称単数、3 人称単数あるいは *ye* に続く形としては、たいてい *may* が使用されている。直説法現在 2 人称単数では *mayst*、あるいは *thou* が一緒になった *maystow* が使用されている。チャョーサーで使用されているうちの圧倒的多数は *may* という形である。

*may* の意味に関しては、チャョーサーでは今日と同じ「～かもしれない」という用法も見られるが、大多数は *may* の基本的意味である「～できる」(have power, be able, can) という意味で使用されている。

*Troilus* での使用回数は、*may* が 284 回、*mayst* が 19 回、*maystow* が 8 回、*mowe* が 3 回、*mowen* が 2 回、*mighte* が 117 回、*might* が 11 回、*mightest* が 1 回、*mighten* が 4 回である。

### 否定辞 ne と動詞 (助動詞) との結合形

否定辞 *ne* は *n-* のように短縮されて、動詞と結合形を作ることがある。次の結合形が *Troilus* で使用されている。数字は *Troilus* における使用回数を示す。

*nam* (=am not) 3 / *nas* (=was not) 23 / *nere* (=were not) 12 / *nis* (=is not) 25 /

nath (=hath not) 2 / nil (=will not) 40 / nel (=will not) 1 / nilt (=wilt not) 4 /  
nolde (wolde not) 29 / noldestow (=ne woldest thou) 1 / noot (=ne woot) 17 /  
not (=ne wot) 4 / niste (=ne wiste) 11 / ne axe (=ne axe) 1

Ther *nas* no cry but “Troilus is there!” (196)

「トロイラスだ」と叫ぶ声ばかりであった。

Al *ner*e it but for man I love most, (1410)

My brother Troilus:

最愛の友トロイラスのためでなければ、

In al this world ther *nis* a better knight (177)

Than he,

世界中でこの方より優れた騎士はいない。

Ther loveth noon, that she *nath* why to pleyne. (777)

恋をする女性には悩みの種がつきものだ。

For trewely I *nil* no lettre wryte. (1161)

だって本当に手紙なんて書く気になれない。

To yow *nolde* I no swiche tales bringe. (308)

おまえにはそんな話を切り出そうとはしないだろう。

I *noot* nat what ye meene. (133)

何の意味なのかさっぱり分らないわ。

### pleyne (=complain)

And pitously gan ay til him to *pleyne*, (1353)

絶えず哀れにも彼に泣き言を述べた。

Ther was no wight to whom she dorste hir *pleyne*. (*Troilus* V. 728)

彼女には自分の悲しみをあえて訴えることのできる人が誰もいなかった。

*pleyne* は *plain* の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。 *plain* はラテン語の *plangere* (胸をたたき、嘆き悲しむ) に由来し、「嘆く、泣き言をいう」 (=complain) という意味であり、強意の接頭辞 *com-* の付いた *complain* と同義である。チョーサーでは *pleyne* と *compleyne* の両方が使用されている。

上記の二番目の例文のように、再帰動詞として *hir pleyne* で「泣き言をいう」の意味になる用法も見られる。

*Troilus* での使用回数は *pleyne* が 27 回、*y-pleyned* が 1 回、一方、*compleyne* が 11 回、*compleynen* が 2 回、*compleyned* が 3 回である。

### quod (=said)

'A! God forbede!' *quod* she. 'Be ye mad?...' (113)

「あら、嫌だ、お気は確か」と彼女は言った。

*Quod* Pandarus, 'Al this knowe I my-selve,...' (106)

パンダラスは言った、「このことは私自身知っていますよ」

*quod* は「～と言った」(*said*) の意味の過去形の動詞。 *bequeath* (遺言で譲る) という語に見られる *-queath* と同じ *quethe* (=say 言う) という動詞の過去形が *quoth* (=said) であるが、*quod* はこの *quoth* の 14 世紀から 17 世紀にかけて見られる形。特に 1350 年頃から 1550 年にかけては、*quod* が最も普通の形であ

った。チョーサーでは *quod* が使用され、*quoth* は使用されていない。今日 *quoth* は古語となっている。

この *quod* は必ず倒置して主語の前に *quod he* のように置かれ、そしてふつう引用文の初めのあたりに挿入されるのを特徴とした。しかし、文頭に置かれたり、文末に置かれることもあった。この *quod* は直接話法で用いられ、間接話法で *said that ...* のように *that* などが続くことはなかった。

*Troilus* における「言った」を意味する *quod* と *seyde* の使用回数

<i>quod</i>	210
<i>seyde</i>	240

### *recche* (=care)

Of him ye *recche* leest wher he bicomе, (1151)

And whether that he live or elles sterve.

女性たちは男性がどうなろうと、生きようが死のうが全然かまわないのだ。

He *roughte* not what unthrift that he seyde. (*Troilus* IV. 431)

彼はくだらないことを喋っていることに頓着しなかった。

*recche* は *reck* の 12 世紀から 15 世紀にかけて見られる形。1600 年頃から *reck* が通常の文語形となった。今日では *reck* は古語または詩語である。*Troilus* で用いられている *recche* の過去形は *roughte* である。

*reck* はふつう否定文で用いられ、また *what* などの疑問文でも用いられ、「気にかける、かまう」(*care*) の意味である。

*Troilus* での使用回数は、*recche* が 11 回、*roughte* が 8 回である。

rede (=advise, guide)

I yow *rede* (*Troilus* I. 258)

To folwen him that so wel can yow lede.

人を導く力のある方に従われるよう皆さんに忠告いたします。

*rede* は「忠告する」、「導く」という意味の語で、元来、*read* (読む) と同一語であった。今日では「忠告する」の意味では古い綴りを残して、*rede* と綴られ、「読む」の意味では *read* と綴られるようになっている。チョーサーでは両者は共に *rede* と綴られている。

saluwe (=salute)

With that he gan hir humbly to *saluwe* (1257)

すると彼はていねいにクリセイデに挨拶した。

*salue* は、ラテン語の *salutare* (=greet) に由来するフランス語の *saluer* が英語に入ったもので、*salute* と同義である。一方、*salute* はラテン語 *salutare* が直接英語に入ったものである。

*Troilus* での *saluwe* の使用回数は 4 回である。*salute* はチョーサーでは使用されていないようである。

say (=saw)

Criseyde, which that alle these thinges *say*, (1265)

この様子をすべて見ていたクリセイデは

Who *sey* ever or this so dul a man? (548)

誰がこんな鈍感な人を見ただろうか。

see (見る) の過去形はチョーサーでは様々な形があり、say (言う) との区別が紛らわしい say (=saw)、sey (=saw) のような形も見られる。

*Troilus* での see の過去形の使用回数は、saw が 16 回、saugh が 16 回、say (saw) が 11 回、sey が 5 回、seigh が 2 回である。

### seche (=seek)

and eek these othere termes alle,

That in swich cas these loveres alle *seche*; (1068)

このような場合に、すべての恋人たちが求める他のすべての名前、

seche は seek (求める) の 12 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。*Troilus* では seke も使用されているが、これは 12 世紀から 17 世紀にかけて見られる形である。

*Troilus* での seek の現在形の使用回数は、seche が 10 回、seke が 2 回、seken が 2 回、sekestow が 1 回、seketh が 1 回である。

### shape (=destine, etc.)

shape という語はチョーサーでは様々な意味において用いられている。チョーサーが用いている主な用法を次にまとめてみる。

1. 「創造する」(create)、「作る」(fashion)
2. 「考案する」(devise)、「計画する」(plan)、「用意する」(prepare)、「割り当てる」(appoint)、「促す」(prompt, induce)
3. 再帰用法で「準備する」(prepare, intend)

この用法は、*OED* が shape 15 の項で、‘*refl.* To set oneself, prepare. Const. to with inf., or for. Obs. Very common in Chaucer.’ と述べているように、チョーサーでは多用されている用法である。

4. 「(神、運命が) 運命づける」(destine, decree)、「決定する」(determine)

5. 自動詞として「起こる」(happen)

用例

1. A-cursed be the day which that nature

*Shoop* me to ben a lyves creature! (*Troilus* IV. 252) (Shoop=created)

造物主がぼくを生あるものとして作り給うた日は呪われよ。

O blake night, as folk in bokes rede,

That *shapen* art by god this world to hyde (*Troilus* III. 1430)

(shapen=created)

書物に書いてあるように、神がこの世を隠すために作り給うた暗い夜よ。

2. For to every wight som goodly aventure

Som tyme is *shape*, (281) (shape=prepared)

誰にでもときには何か幸運が用意されるものだから。

yet shal I *shape* it so, (1363) (shape=arrange, devise)

That thou shalt come in to a certayn place,

あなたをある場所へお連れするよう取り計らいましょう。

At which the god of love gan loken rowe

Right for despyt, and *shoop* for to ben wroken; (*Troilus* I. 207)

(shoop=planned)

これを聞くと、恋の神は悪意で色をなし、懲らしめようと計画した。

The fate wolde his soule sholde unbodie,

And *shapen* hadde a mene it out to dryve; (*Troilus* V. 1551)

(shapen=devised)

運命は彼の魂が肉体から離脱することを欲し、肉体から追い出す手段を工夫した。

3. He can now seen non other remedye,

But for to *shape* him sone for to dye. (*Troilus* V. 1211)

(shape him=intend, prepare)

彼はすぐにも死のうと意図するほかに取るべき方策を見だし得なかった。

4. Lettre, a blisful destenee

Thee *shapen* is, my lady shal thee see. (1091) (shapen=destined)

手紙よ、幸運がお前に用意されている、あの方がお前を見るんだから。

5. So *shoop* it, that hym fil that day a tene (61) (shoop=happened)

In love,

たまたまその日は恋の苦悩に襲われた。

*Troilus* での *shape* の使用回数は、*shape* が 7 回、*shapeth* が 2 回、*y-shape* が 1 回、*shapen* が 4 回、*y-shapen* が 1 回、*shoop* が 6 回である。

### shenden (=disgrace, ruin, etc.)

*shend* は *Troilus* では次のような意味で使用されている。これらは今日では古語となっている。

1. 「辱める」 (put to shame; disgrace)
2. 「非難する」 (blame)、「叱る」 (scold)
3. 「破壊する」 (destroy)、「損ねる」 (damage)、「だめにする」 (spoil)、「汚す」 (defile)



用例

1. That Manes, which that goddes ben of peyne,

Shal been agast that Grekes wol hem *shende*. (*Troilus* V. 893)

(shende=disgrace)

呵責の神であるマネスでさえ、ギリシア軍に辱められるとおびえるだろう。

2. for these bokes wol me *shende*. (*Troilus* V. 1060) (shende=blame)

これらの本はぼくを非難するだろう。

3. in what maner wyse

This town to *shende*, (*Troilus* IV. 79) (shende=destroy)

いかなる仕方でのこの町を破壊するか、

As helpe me god, ye *shenden* every deel! (590) (shenden=spoil)

本当に、なにもかもだめにしてしまわれるわ。

*Troilus* での使用回数は、shende が 7 回、shenden が 1 回、shent が 2 回、shente が 2 回である。

**spede (=succeed, cause to succeed)**

God woot that wel the soner *spedde* he. (686) (spedde=succeeded)

確かに、彼の運はそれだけ早く開けた。

the devel *spede* him that it recche! (*Troilus* IV. 630)

(spede=cause to succeed, assist)

くよくよする人を悪魔が助けんことを。

They *spedde* hem fro the souper un-to bedde; (947)

(*spedde* hem=*made haste*)

彼らは夕食からベッドへと急いだ。

*spede* は *speed* の 13 世紀から 15 世紀にかけて見られる形。過去形は *spedde* が使用されている。

チョーサーでは *spede* は次の意味で使用されている。

1. 「成功する、成功させる」(*succeed, cause to succeed*)、「繁栄する、繁栄させる」(*prosper, cause to prosper*)
2. 「促進する」(*promote*)、「成し遂げる」(*accomplish*)
3. 「扱う」(*deal with*)
4. 「急がせる」
5. 再帰用法または自動詞で、「急ぐ」(*make haste*)

頻度の高い 1 の「成功する」(*succeed*) の意味は今日では古語である。チョーサーは *Troilus* 以外の作品で *succeed* という語を使用しているが、それは「(～に) 続く」という意味での使用であって、「成功する」という意味においてではない。

*Troilus* での *spede* の使用回数は、*spede* が 7 回、*spedde* が 10 回、*spedden* が 1 回である。

### *sterve (=die)*

So that wel neigh I *sterve* for the peyne. (1530)

それでぼくは苦悩のあまり死にそうなんだ。

*sterve* は *starve* の 14 世紀から 17 世紀にかけて見られる形。今日 *starve* は「餓死する、餓死させる」という意味であるが、この意味は 16 世紀以降の意味である。*starve* は元来ドイツ語の *sterben* (死ぬ) と同語源の語で、「死ぬ」(*die*) と

いう意味であった。チョーサーでは *sterve* はすべて「死ぬ」という意味で用いられている。

*Troilus* での使用回数は、*sterve* が 23 回、*sterven* が 2 回、*starf* が 5 回である。一方、*die* (死ぬ) に関しては、*Troilus* では、*deye* が 41 回、*deyen* が 2 回、*deyde* が 11 回、*deydest* が 1 回、*deyinge* が 1 回、*dye* が 29 回、*dyen* が 7 回、*dyeth* が 1 回使用されている。

*Confessio Amantis* では、*sterve* に関しては、*sterve* が 8 回、*sterven* が 1 回、*sterveth* が 2 回、*starf* が 1 回、*storve* が 1 回、*storven* が 1 回使用されている。*die* に関しては、*deie* が 52 回、*die* が 13 回、*dye* が 15 回、*dyen* が 1 回、*deide* が 23 回、*deiden* が 1 回、*deiede* が 1 回、*dyde* が 2 回、*deyinge* が 1 回使用されている。

*Troilus* と *Confessio Amantis* における「死ぬ」の意味の *starve* と *die* の使用回数

<i>Troilus</i>	使用回数	<i>Confessio Amantis</i>	使用回数
<i>sterve</i> 等	30 (24%)	<i>sterve</i> 等	14 (11%)
<i>deye, dye</i> 等	93 (76%)	<i>deie, dye</i> 等	109 (89%)

### stinte (=stop)

But woltow *stinten* al this woful chere, (1361)

この悲しそうな顔をよしてくださいませんか。

*stint* は今日では「〈金・食料などを〉切り詰める」という意味で用いられる語であるが、この意味は 18 世紀以降のものである。チョーサーでは他動詞・自動詞として「止める、止む」(*stop, cease*) という意味で用いられている。また「〈悲しみなどを〉消す」(*assuage, quench*) という意味で使用される場合もある。

*Troilus* での使用回数は、*stinte* が 9 回、*stint* が 2 回、*stinten* が 2 回、*stinteth* が 3 回、*stente* が 11 回、*stenten* が 1 回である。一方、同義の *stop*

に関しては、*Troilus* で *stoppen* が 1 回使用されているだけである。また、別の同義語 *cease* に関しては、*cesse* が 6 回、*cessed* が 2 回、*cesseth* が 2 回、*cese* が 1 回使用されている。

*Troilus* における「止める」の意味の *stint* と *cease* と *stop* の使用回数

stinte 等	28
cesse 等	11
stoppen	1

### syke (=sigh)

With that she gan ful sorwfully to *syke*; (428)

こう言って、彼女はさも悲しそうにため息をついた。

*syke* (=sike) は *sigh* (ため息をつく) の別形。過去形としては *syked* と *sighte* の両方が用いられている。

*Troilus* での使用回数は、*syke* が 14 回、*syked* が 3 回、*sighte* が 9 回である。

### thar (=it is necessary)

And eek, for she is straunge, he wol forbere

His ese, which that him *thar* nought for yow; (1661)

それに彼女はなじみが薄いので、彼は固くおなりになるでしょう、あなた方に対してならそうする必要がないのに。

*thar* は非人称構文で *it is necessary* の意味で用いられる。*him thar* で *he need* の意味となり、上記の例文にある *him thar nought* では *he need not* の意味となる。この *thar* は今日では廃語である。

*Troilus* での使用回数は、*thar* が 1 回、*thurfte* が 1 回、*thurste* が 1 回である。一方、*nedeth* (必要である) は 17 回使用されている。

thenke (=think), think (=seem; think)

And were it thing that me *thoughte* unsittinge, (307)

To yow nolde I no swiche tales bringe.

もしふさわしくない話だと思ったなら、こんな話は持ってこないよ。

and wordes tho

That hadden prys, now wonder nyce and straunge

Us *thinketh* hem; (25)

昔価値を持っていた言葉も、今ではわれわれには愚かに、異様に思われる。

チョーサーでは *thinke* (=think) の用法に非人称構文が見られ、ふつう与格の代名詞を伴って「思われる」(seem) という意味になる。上記の二つめの例文では、人称構文との混同が見られ、あたかも人称構文であるかのごとくに目的語の *hem* を伴っている。

*think* には、OE では二つの別の語があった。一つは、*pencan* (思う) (過去形 *pohte*, 過去分詞 *gepoht*) であり、これはドイツ語の *denken* (考える) と同語源の語で、ふつうの人称構文を取った。もう一つは、*byncan* (=seem 思われる) (過去形 *puhte*, 過去分詞 *gepuht*) で、この語は非人称構文を取った。しかし、ME 期には両者の混同が起り、やがて非人称構文の方は *methinks* (過去 *methought*) に形をとどめるだけとなって、消滅していった。

チョーサーでも両者の混同が見られる。チョーサーでは *thenk* 形と *think* 形とが用いられており、それら両者の過去形・過去分詞としてはともに *thought* 形とが用いられている。Skeat 版 *Troilus* で見る限り、*thenk* 形は例外なくすべて「思う」という意味の人称構文で用いられている。一方、*think* 形は、「思われる」

という非人称構文の場合と、「思う」という人称構文の場合とがあり、**think-**形では二つの動詞が混同されていることがわかる。過去形、過去分詞の **thought-**形では両者が一体となっており、当然、両方の構文が見られる。

*Troilus* では **think-**、**think-**、**thought-** すべて合わせて、149 回使用されており、そのうち「思う」の意味の人称構文が 110 回、「思われる」の意味の非人称構文が 39 回である。

**think-, think-, thought- の人称構文、非人称構文の割合**

人称構文	110 (74%)
非人称構文	39 (26%)
計	149 (100%)

**それぞれの形の人称構文、非人称構文の割合**

	人称構文	非人称構文	計
<b>think-</b>	48 (100%)	0 (0%)	48 (100%)
<b>think-</b>	9 (36%)	16 (64%)	25 (100%)
<b>thought-</b>	53 (70%)	23 (30%)	76 (100%)

**「思われる」の意味の think と seem の使用回数**

<b>think-, thought-</b>	39 (57%)
<b>seme</b>	30 (43%)
計	69 (100%)

**分離を表す接頭辞 to-**

to-breſte / to-cleve / to-dashed / to-greve / to-hewen / to-laugh / to-melte /  
to-rende / to-rente / to-ſterte / to-torn (to-breſte が 2 回、その他は 1 回ず

つ使用されている)

For man may love, of possibilitee,

A womman so, his herte may *to-breste*, (608)

男性が胸の張り裂けるほど女性を愛することもあり得る。

*Troilus* では動詞に分離を表す接頭辞 *to-* の付いたものが見られる。この *to-* は「分離」(asunder, apart, in pieces) の意味を持つ。動詞自体が分離の意味を持つものに付けられることが多かったため、これらの場合、*to-* はあまり分離の意味を添えることがなかった。それで分離の意味を持たない動詞にも「強意」として *to-* が付けられるようになった。

この *to-* は 15 世紀には急速に消えていき、1500 年以降残ったのはわずかとなった。*Troilus* では合計 11 個の *to-* 動詞が見られる (そのうちの 1 つは 2 回使用されている)。

#### triste (=trust)

As ye ben he that I love most and *triste*, (247)

私の一番好きな、信頼している叔父様なんどもの、

*triste* は 13 世紀から 16 世紀頃まで用いられた *trust* の別形。*Troilus* では名詞・動詞ともに、*trist* と *trust* の両方が使用されている。変化形を含めると、*trist* は 21 回、*trust* は 18 回使用されている。

#### trowe (=believe)

I *trowe* it be the beste: (1448)

それが一番いいと思うよ。

*trow* は *true* や *trust* と同系の語で、「信じる」(*believe*)、「信頼する」(*trust*) の意味であり、「思う」という意味で使用されることもあった。*trow* は今日では古語となっている。

*Troilus* での使用回数は、*trowe* が 31 回、*trowed* が 3 回、*trowen* が 5 回、*troweth* が 1 回である。

*Troilus* における「信じる」を表す語の使用回数

<i>trowe</i>	40
<i>leve (=believe)</i>	16
<i>bileve</i>	2

#### wene (=think)

But *wene* ye that every wrecche woot (890)

The parfit blisse of love?

誰にでも恋愛の完全な喜びがわかるとお思いになって？

*wene* は *ween* (=think 思う) の 13 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。*ween* は 17 世紀に一般には使用されなくなったが、*archaism* として *I ween* (=I think) という挿入句として残った。今日では古語または詩語である。

*Troilus* での使用回数は、*wene* が 15 回、*wenen* が 3 回、*wenest* が 2 回、*weneth* が 2 回、*wende* が 19 回、*wend* が 2 回、*wenig* が 1 回、*weninge* が 1 回で、計 45 回使用されている。

#### wex (=grow)

And every wight gan *waxen* for accesse (1578)

A leche anoon,

誰もがすぐに熱病に対する医者になった。



wax は元来 grow と同義語であり、grow よりも頻繁に使用される語であったが、やがてその使用は文語に限られるようになり、口語では grow に取って代わられた。チョーサーでは become (～になる) と同義の用法も見られる。

*Troilus* での使用回数は wax が 2 回、waxen が 7 回、wexen が 1 回、y-waxen が 2 回、waxeth が 1 回である。意味を度外視した wax, grow, become の使用頻度は、次の表の通りである。

*Troilus* における wax, grow, become の使用回数

wax	13
grow	5
become	5

#### wite (=know)

And eek me longeth it to *wite*, (312)

それに知りたくて仕方がないんだもの。

And sin ye *woot* that myn entente is clene, (580)

ぼくの意図がきれいなことは知ってくれているだろうから、

Tel me how first ye *wisten* of his wo: (501)

仰ってください、最初どうやってあの方の煩悶を知ったのかを。

wite は wit の 13 世紀から 15 世紀にかけて見られる形。OE では witan という形であったこの語は、ドイツ語の wissen (知る) と同語源の語であり、名詞の wit (機知) とも同系語である。wite はラテン語の videre (=see 見る) とも同系語であり、元来 'have seen' という意味であったものが、'know' という意味を持つに至ったものである。

チョーサーでは I wot, thou wost, he wot, we [ye, they] wite(n), 過去形 wiste, 過去分詞 wist などと変化している。意味は know (知る) と同義である。Troilus では God wot (=God knows 確かに、誓って) というフレーズで用いられることも多い。

Troilus での使用回数は、woot が 73 回、wot が 40 回、wite が 5 回、witen が 5 回、witeth が 1 回、wiste が 34 回、wisten が 1 回、wistestow が 1 回、wist が 18 回である。次の表から、「知る」という意味の語としては、know よりも wite の方が多く用いられていることが分る。

Troilus における wite と know およびそれらの変換形の使用回数

wite	178
know	71

wrye (=cover; =go)

And wel the hotter been the gledes rede,

That men hem wryen with asshen pale and dede. (539)

鉛色の冷たい灰をかぶせられた赤い炭はますます熱くなる。

The nightes fo, al this clepe I the sonne,

Gan westren faste, and downward for to wrye, (906)

私が太陽と呼ぶ夜の敵は、足早に西に向かい、そして沈んだ。

上記の最初の例文の wrye は「おおう」(cover)、「隠す」(conceal) の意味。この語は今日では廃語となっている。

Troilus での wrye (=cover) の使用回数は、wrye が 4 回、wryen が 1 回、y-wrye が 1 回である。

上記の二つめの例文の wrye は別の語であって、「行く」(go, turn) の意味であ

る。

*Troilus* での *wrye* (=go) の使用回数は *wrye* が 1 回、*y-wryen* が 1 回である。

### wyte (=blame)

That of his deeth ye be nought for to *wyte*. (385)

おまえがあの方のお命を奪ったとって責められないように。

*wite* は今日でもスコットランドに残っている語で、「とがめる、責める」(blame)、「～のせいにする」(impute) であり、名詞としては「非難」(blame, reproach) の意味である。

*Troilus* での *wyte* の使用回数は、動詞が 6 回、名詞が 2 回である。

### 接頭辞 y-

Who hath ben wel *y-bete* (940)

To-day with swerdes

誰でした、今日剣で散々たたかれたのは。

Nece, *y-see* who cometh here ryde! (1253)

ねえお前、ご覧よ、こちらに馬を進めてこられる人を。

接頭辞 *y-* は、元来 'with, together' を意味した OE の接頭辞 *3e-* が ME 期には *i-* となり、そしてさらには *y-* となったものである。これはドイツ語の *gewiss* (確かな) や *getrunken* (=drunk) など過去分詞に見られる接頭辞の *ge-* と語源的には同じものである。ドイツ語の *gewiss* はチャーサーの英語では *i-wis* (確かに) に対応する。またドイツ語の *gleich* (同じ) は *y-lyke* (=alike) に対応する。  
*y-* の意味は「一緒に」という元の意味の他、「完了、達成」であったり、単に「強

意」であったり、あるいはほとんど意味のないこともあった。

OE の *3e* は北部の英語では、接頭辞と分る形では 1200 年までにほとんど消失した。大陸の低地ドイツ語や高地ドイツ語に存在したこの *3e* は、古ノルド語(北欧語)には存在せず、北部の英語には古ノルド語の影響があったものと思われる。名詞や形容詞、それに過去分詞以外の動詞に *y* が付いた形は、南部および中西部の方言でのみ続いたが、それも 14 世紀末を超えることはなかった。過去分詞は南部の ME では 15 世紀中頃まで規則的に *3e* を付けて作られていた。ME ではフランス語から入った語の過去分詞にも、*yblamed* や *yoccupied* のようにこの接頭辞が使われることがあった。過去分詞に付けた *y* はルネッサンス期の詩人 Edmund Spenser の archaism (古語法) の特徴の一つとなっているが、これはチャョーサーなどの模倣と考えられる。18 世紀の Thomson などの Spenserians (スペンサーを模倣した詩人たち) にも、*ybent*, *ybound*, *ybrought*, *yclad*, *yclept*, *ydight*, *ydrad*, *ypent*, *ypight*, *ywrough* などの語の使用が見られる。

チャョーサーが用いている接頭辞 *y* は、*ywis* や *yfere* などを別にすれば、他はほとんどが動詞の過去分詞に付けられたものである。過去分詞以外の動詞では *ysee* (=see) が見られる。*yee* の *Troilus* での使用回数は、*ysee* が 6 回、*ysene* が 2 回、*yseye* が 1 回、*yseyn* が 1 回である。

チャョーサーは接頭辞 *y* を多用していて、*Troilus* では *y* が 267 回、*i* が 2 回使用されている。一方、ガワーは動詞の *y* を使用していないようで、*Confessio Amantis* では過去分詞など動詞に付けた *y* は見られない。

### yeve, yif (=give)

And *yeve* me sorwe, but he shal it rewe, (1609)

あの人が後悔しないとしたら、こんな悲しいことはありません。

*Yif* me your hond, (293)

さあ握手をしよう。

yeve は give の 14 世紀から 16 世紀にかけて見られる形。give は OE の *giefan* に由来し、これは ME 期にミッドランドや南部では *geven*, *gíven* という形となった。

今日の give の g 音は文献では 1200 年頃の *Ormulum* に最初に現れる。give 形は最初北部に生じた形で、これは北欧語の影響だと考えられている。14-15 世紀に g で始まる北部形が徐々に南下してミッドランド方言に入っていった。15-16 世紀には *geve* 形がイングランドやスコットランドの作家において見られるようになった。

Langland では g 形、y 形の両方が見られるが、チョーサーでは y 形の *yeve*, *yif*, *yaf* 等のみが使用されていて、g 形は見られない。ガワーでも y 形のみが使用され、g 形は見られない。15 世紀にはミッドランドや南部ではまだ y 形が優勢であったが、1500 年頃 y 形は文語からは完全に姿を消した。

*Troilus* での使用回数は、*yeve* が 19 回、*yeven* が 6 回、*yeveth* が 1 回、*yif* が 4 回、*y-yive* が 1 回、*y-yevel* 回、*yave* が 3 回、*yaf* が 11 回、*yaven* が 1 回である。なお、*forgive* という語についても、*Troilus* では *foryeve* が 3 回、*for-yeve* が 2 回、*foryive* が 2 回、*foryeven* が 1 回使用されていて、すべて y を用いた形が用いられている。

主要参考文献

- Benson, Larry D. ed., *The Riverside Chaucer* Third Edition (Oxford U. P., 1987)
- Davis, Norman et al. ed., *A Chaucer Glossary* (Oxford U. P., 1979)
- Franz, Wilhelm, *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa*, 齋藤静、山口秀夫、太田朗共  
訳『シェークスピアの英語—詩と散文—』(篠崎書林、昭和33年)
- Kerkhof, J., *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer* (Leiden: E. J. Brill, 1982)
- Kurath, Hans ed., *Middle English Dictionary* (University of Michigan Press, 1957)
- Macaulay, G. C., *The English Works of John Gower* in 2 vols. (Oxford U. P., 1901, 1979)
- Mossé, Fernand, *A Handbook of Middle English* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1952,  
1968)
- Mustanoja, Tauno F., *A Middle English Syntax: Part I. Parts of Speech* (Meicho Fukyu Kai,  
1985)
- Robinson, F. N. ed., *The Works of Geoffrey Chaucer* Second Edition (Oxford U. P., 1957)
- Skeat, Walter W., *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* in 6 vols. (Oxford U. P., 1894,  
1972)
- Tatlock, John S. P. and Arthur G. Kennedy ed., *A Concordance to the Complete Works of  
Geoffrey Chaucer* (Peter Smith, 1963)
- The Oxford English Dictionary* Second Edition on CD-ROM (Oxford U. P., 1993)
- 官田武志訳『トゥローイラスとクリセイデ』(ごびあん書房、昭和62年)
- 武居正太郎「GEOFFREY CHAUCER の英語」(I)~(IX)『長崎大学教育学部人文科学報告』第  
17号~第25号